

圖書その折々

一 圖書館の不備と其補足私案

圖書館の現狀

近年日本の圖書館も相當に進歩したに相違ない、御大典記念に各府縣に圖書館の設置されたのも少くない、かぞへ來たれば圖書館と稱するもの八千幾百に上り、文化のため喜ぶべきではあるが、しかしその内容如何と吟味するときは、まだ、整頓に甚だ遠いといはざるを得ぬ。各地にある大小の圖書館、それが府縣立であれ、市立であれ、それ等はたゞ僅かに形式を備へたといふまでだから論外におくとして、三都にある公私の大圖書館について見ても、未だ頗る備はるに遠いものである。これ等の圖書館の大なるものは現に百萬に垂んとする藏書を有してあるけれども、洋籍の備はらざるは勿論、和漢書においても決して備はつてゐるとはいひがたい。圖書館を圖書の淵藪と解してゐる者は圖書館萬能を説くけれども、今日の狀態では萬能どころか、百能もどうであらうか。普通一寸の用を足す圖書は缺けてゐぬとしても、少しくこみ

入つた事を調べようと思つて、圖書館に行つて参考書を捜して見ても、十の七八は備はつてをらぬので失望する。なほ一段高い研究となると、参考資料を得ることは幾んど不可能である。例へば古書を精確に校正せんとすることがありとすると、それには古版を要する。支那の本ならば宋版、元版を参考しなければならぬ、或は古代の舊鈔本を参考しなければならぬことがあるが、その底本となるものは絶対にないとはいはぬが、宋元版などは標本位しかなく、圖書館にこれを求めんとするは無理な注文であり、古鈔本なども頗る貴重のもので、それも大體備はつてゐない。宋元版は兎も角、それを日本で復刻した五山版とても標本位しかないことを考へると、大圖書館といつても、今日の所如何にも貧弱であるといはざるを得ぬ。勿論圖書館に就いて求むる所は百般の事に涉り、通例世間に得難いものを圖書館に求めるのであるが、さて實際はその諦めに應じ兼ねることが十の七八まであつて、需要者を毎日失望せしめるのが現状である。理想的に十分のことをいへば、世間を捜し廻つても到底得がたいものが、圖書館に行けば見られるといふことでなければ、圖書館は備はつて居るとはいへぬが、圖書館の現状、これを望むのは無理な注文であらう。

圖書館に十分備はることを望むには、資金の供給が今日は餘りに貧弱である。差當り新刊の内外の圖書を購ひ了れば經費が手一杯であるといふやうな現狀で、如何にして手を延ばすことが出來ようか。圖書の希觀のものとなると、一部で千圓以上のものが多い、浮世繪本ですら一冊幾百圓のものがある、それを圖書館で購はんとすると無理解な監督者から抗議が起るやうでは、圖書館も縮み上らざるを得ぬ。また今日の如き貧弱な圖書購入費で手を一部五百圓千圓のものに延ばすのは、事實無謀の沙汰であるかも知れぬ。圖書館は、たとひほしいものが市上にしても、經費のために指をくはへて見す／＼逃がして仕舞ふことが頻繁にある。これが圖書館の備はらざる一原因であり、また主なる原因であらう。

圖書館は、最初狹義に解釋して、或る者を探るべからずとした。即ち日本に長く行はれた儒教の影響で、いやしくも風教を助けるものでなければ探るべからずと狹義に解した結果、狹斜文學、花柳の雜書を全く排斥した時代もあつた。追々その非を覺り、これ等のものを備へようとする時は既に遅しで、これ等のもの、價が著るしく騰昂し、これも買ひ易からざるものになつた。大圖書館に割合にこの部類の乏しいのはこのゆゑである。狹斜文學も、風俗研究には今

は大切な資料となり、各種の浮世繪も、同じ意味で必要である。演劇に關する多くの圖書、脚本、臺帳、番付、評判記、淨瑠璃本、これも風俗や藝術の資料であるが、これ等に對し或る時代には風教に害ありとし、或は玩具に近いものとして執らなかつたこともあるので、大體これ等の部類は備はつてゐぬ。これも圖書館を狹義に解した結果に外ならぬ。圖書館を狹義に解したのは、儒教の影響にもよるが、一つは資金の不十分も手傳つてゐる。

圖書館とても書畫部類を全然要なしとするものではない。たとへば繪卷物の類や或る種類の墨蹟や法帖などの類は圖書館になくてならぬもので、現にいくらかはあるが、それ等は偶然にあるので、それも粗悪な副本や複製ものなどがあるまで、その道の研究家が範となし得るやうなものはない。これも購入費がないから生じたことでもあるが、書畫の蒐集は博物館の領域に屬するものとして除外した、めにもよる。なほ圖書館で除外してゐるものには金石の部類がある。これも博物館の領域に屬するものとしてゐる趣きがあつて、大體頗る闕けてゐる。

近年帝大でしきりに金石の拓本を集めてゐることは隠れもないが、どこの圖書館でも日本の金石拓本をすら多く有して居る所がない。まして金石の豊富な支那の拓本、殊に近年盛んに出

土する金石拓本に於てをやである。これ等は圖書館に是非備はらねばならぬもので、かつ採集に多くの資金を要するものでもない。金石の内でも最も小なるものは印譜であるが、これが又著名のものだけ一と通り備へてゐる所がない。この種のもの、備はらざる一原因は取扱の面倒にもよるであらう。一丈も二丈もある一面碑の拓本を、表装せずには置かれず、これを表装したり適當に保存することが煩はしいために閑却されてゐると思はれるが、どの道博物館に譲つて濟む譯のものでない。

かく考へ來ると、圖書館は多くのものを博物館に譲つてゐたり、世の好事家や趣味家の探るに任せてゐるものが決して少くない、それだけ圖書館は不備であるともいひ得るのである。全體博物館の領域は、どこが經界であるかは面倒な問題で、こゝにはその研究を避けるが、圖書館を廣義に解すると、博物館に譲つたものが當然圖書館の領域に屬することになる譯で、事實圖書館は追々廣義に解せられてゐるが、廣義に解すれば解するほど不備は目立つて來る。従つて圖書館萬能が怪しくなる。いふまでもなく、いくら圖書館に資金があつても到底天下のあらゆる圖書を網羅し得べきでない。それはなほ後段に述べるが、それに先立ち、現在我國の圖書

は如何に分布されてゐるかを一と通り考察して見よう。

圖書の分布

日本の圖書の分布してゐる所を尋ねるに、大略左の十箇所であると思ふ。

一、内府 帝室御料の圖書は、宸記、宸翰をはじめとして、御手元本は特殊のもので、宮中奥深く藏してあるから思議の外にあるが、多くの御藏本は、圖書寮において保管してゐる。この内には版本も鈔本もあり、頗る貴重のものである。徳川氏の紅葉山文庫にあつた、多くの圖書の内、佳本は皆内府に移つてゐる。他に獻上本もあり、種々の事情で御買上となつたものもある。日本に唯一の道教の藏經もこゝに存在する。

二、官廳 各官廳には、それ／＼その所屬の記録があり、その廳で出版したものがあつたり、またその専門に屬する参考書があるはいふまでもない。各省所藏の本を騙つて一ヶ所に寄せ集めたのが内閣文庫で、中には徳川家を初め各藩から引上げたものもあり、各部門の版本の内には珍しい古版や、稀なる寫本もあり、明末清初に支那にほろびた逸書だけでも百點もあつ

て、眞に鬱然たるものだ。

三、圖書館 官私公立圖書館並に各種學校附屬圖書館、一私人の文庫をもこゝに包含する。藏書の數がこの一類に尤も多いことはいふまでもない。なほこの圖書館の範圍には、東洋文庫の如き特殊の圖書を有するものもあり、陸海軍兩省、美術學校の文庫の如き、其専門に屬するものもある。

四、博物館 東西兩京にある博物館、表慶館、遞信博物館などもまた圖書の淵藪である。前にも陳べた如く、こゝには圖書館にあらまほしいもので、圖書館に備はらざるものが多くある。殊に貴重珍奇のものがある。

五、社寺 神書佛典の淵藪は社寺である。社寺の緣起を初め古文書は多くこゝに存し、中には國寶となつてゐるものもある。經卷の最も大部のものは一切經で、芝の三緣山には三大藏經があり、東大寺の聖語藏には世に知れざる珍奇の經があり、文書についていへば、東寺には百合文書があり、高野山にもおびたしい古文書がある。尾張の眞福寺には、佛書の外に儒書や古鈔本が多く藏してある。

六、史料編纂所　これは帝大の範圍にあれども、圖書館とはおのづから其性質を異にし、史料の集積所である。凡そ國史の資料となるべき各時代の文書は、謄寫によりて頗る備はり、諸家の貴重書類の副本は、大略こゝに存するといふも不可でない。圖書館に最も缺けてゐる、この部類のものは概ねこゝに藏されてゐる。

七、舊家　華族堂上家には、その家に傳はる古記録が多く藏されてゐる。むかし世襲的に儀式典例を司りたる家には、有識故實いしきこじに關する古記が保存され、且つ諸大名が歴代蒐集した藏本も夥しくある。加賀の前田松雲公の蒐集の如きは古今藏書家の魁首で、その佳本の多きは天下に冠絶する。

八、富豪　この内には前の舊家に屬するものもあるが、金満家殊に暴富の家が金に任せて天下無双のものを買い集め、それを誇りとするものが少からずある。その蒐集は概ね書畫部類に屬するが、中には圖書と見るべきもので、巨資を投ぜざれば手に入り難いものがある。希觀の繪巻物や古寫經や上代の墨蹟などが、多くは此手に歸してゐる。

九、藏書家　各方面の學者、或は圖書の趣味家が、研究、或は趣味のために多く圖書を蒐集し

て私藏してゐるものが少くない。殊に興味家の蒐集にかゝるものには珍奇希観のものが多く、圖書館に缺く所のものが却つてこの方面に藏されてゐる。舊家にも藏書家が多くあるから、多少嗜み合ふやうでもあるが、おのづから性質も異なるがゆゑにこれを一類とする。

十、特殊蒐集家 好事の人が或る特殊の圖書に興味を有ち、それに偏して蒐集をつとめ、徹底的に蒐集する者が甚だ多い。例へば詩集のみを集める人、俳句、川柳などを専ら集める人、或は往來物、或は黄表紙、洒落本、或は浮世繪本といふ如く範圍を狭めて集める。その結果として希觀珍奇のものはその手に歸し、數は必ずしも多からずとも、その一類においては一種の藏書家である。併し普通の藏書家とその性質を異にするがゆゑにこれを一類とする。

間口を廣げよ

わが國の圖書の分布が上述の如く十類にも及んでゐて、圖書館はたいその一類に過ぎぬ。圖書館が如何にその數において、他類を壓倒するものがあるにしても、千にも滿つる圖書館を一類にしてゐるのだから重複本が頗る多く、殊にあり觸れ本が十の八九を占めてゐる。特殊の本

に至ると、寧ろ他の九類にありともいへる。勿論他の九類に蔵する圖書が全部特殊のものではないが、内府には内府特殊のものがあり、官廳には官廳特殊のものがあり、博物館、社寺、舊家、皆それ／＼特殊のものがある。史料と或る特殊蒐集家の圖書に至つては、その大部分が特殊のものである。かく廣い分布を見ると圖書の範圍も廣いもので、圖書館の藏本は僅にその一部分に過ぎぬ。この中には天下唯一のものや、すでに國寶に指定されたものや、又國寶に相當するものがどれほどあるも知れぬ。その多くは圖書館以外に分布して、圖書館にはかゝるものは九牛の一毛もない。希觀貴重ものは外にあつて、圖書館には藥にするほどの小粒しかない。勿論希觀貴重ものも必ずしも圖書館に必要ありとはいはぬが、圖書館に備はるを要して力の及ばないため手に入らないものがどれほどあるか、實に數知れぬほどある。

勿論幾ら金錢を投じても絶対に手に入り兼ねる物もあるから、圖書館が前途大いに發達し購買力が萬倍しても、天下の珍籍を網羅し得るとは思へない、又網羅せねばならぬとも思はぬ。例へば或る特殊の蒐集家の如く、一類に偏して徹底的に何もかも蒐めるごときは圖書館の必ずしもなすべきことでない。往來ものを幾百も寄せ集めたり、千社参りの札を幾千枚も集めるご

ときは、その趣味家にまかせて差支へない。又史料の如き、すでに大成に近きものがあり、これを藏する所もあるのに、それを又一々謄寫して圖書館に藏するにも及ばぬ。陸心源舊藏の二百種の宋本が岩崎家にあるからというて、それに倣うて宋本の蒐集に没頭するにも及ばぬ。すでに特殊の藏者があれば、それを國用に供し、圖書館の不備を補へば、それでよいのである。

圖書館は、將來如何にとめても、天下の珍籍を網羅することは到底不可能である。たゞ大圖書館の面目上、是非備へるを要するものを大いに補足することは望ましいが、何というても續々出る内外の圖書を買ひ集めるすら容易でないのに、廣義の圖書館相應の體面を保てと求めるのも或は無理かもしれぬ。が實は金次第で或る程度まで整頓せしむることは、強ちむづかしいかも知れぬ。到底金力において圖書館が手に入り兼ねるものは、藏者に勧めてその寄託を受け、特別に保護する事も、闕を補ふの一法に相違ない。此種のもの、内には正しく國寶たる資格を具するものもあるが、それが頗る危険な状態に置かれ、或は紛失したり、盜難に罹つたり、火災に亡びたりする憂ひがある。この種のもものは天下唯一のものであるから、堅固に保護するの必要がある。その寄託を受けるのはその藏者に取つても大切の事であるから、圖書

館の倉庫が堅牢であり、取扱や保管に信用があれば寄託の習慣も起るのであるが、従前斯様のものを等閑視した、めに、藏者は圖書館を無縁の者としてゐる觀がある。畢竟圖書館を狭義に解した餘弊で、圖書館が高い趣味をもたないために、藏者が寄託を危むのも一概に無理とはいはぬ。

兎角圖書館の間口を大いに廣げるでなければ、圖書館萬能など、はいひかねる。よし間口をひろけても萬能たることは出来ないにした處で、その氣宇は大ならざるを得ぬ。資力に乏しい故を以つて勝手な理窟をつけて強ひてその領域を狭めるのは、たまく不利を醸すゆゑんで、多くの人は、或る形式を具するものでなければ圖書館には不要と思ひ、或は圖書館に寄託すれば閱覽に供されて、大切なものがサンザンに汚損されるとのみ信じてゐる。これ等は全くの誤解で、貴重のものに對しては、現在でも嚴重の保管法があり、特殊の研究者に限つて監視を附して見せてゐる。

今後貴重圖書の寄託を受けるとすれば、特別の保管法を設け、寄託者の安心を博すべきはいふまでもない。

富豪の文庫

私は、以上のこと、貴重圖書を蔵する諸家がその襟度を大にして、公益のためその門外不出の貴重書を最も信用ある圖書館に寄託することを勸説するものであるが、他日は兎も角も、今日これが直ちに行はれようとも思はぬ。家に蔵も有たぬ人は、火災を恐れて僅ばかりの愛蔵の圖書を寄託することは寧ろ欲するでもあらうが、莫大の珍籍を擁する舊大名などになると、それを寄託することが煩はしくもあり、圖書館にしてもそれほど大数の圖書の寄託を受ける設備もない。かゝる大壘藏家は、圖書館に託せんよりは、寧ろ自ら文庫を建てることを選ぶであらう。近來圖書を死藏して人に秘することの愚を覺り、開放の機運に向つて來たのは文化のため喜ぶべきことで、舊大名などで文庫の設立を目ろんでゐるものがチラホラある。私はこれを美舉として賛成し、續々事實に現はれんことを望むものである。

昔の雄藩の内に貴重の圖書に富むは前田家を第一に推すが、私は先づ前田家が率先して範を示してもらひたいと思ふ。なほ他の富豪も追々これに倣はんことを冀ふ。富豪においてはずで

に若干の先例があり、そして尤も著明な例は岩崎家の東洋文庫にある。私は富豪に向つて、必ずしもその襲藏の圖書のみを以つて文庫を經營せよとはいぬ、岩崎家にならうて他の襲藏を繼承することにしてもよろしい。例へば支那の「四庫全書」を一部購ひ得べくんば、それを以つて一館を建てるもおもしろからう。

私は富豪に文庫經營を慫慂すると共に多少の注文がある。それは外でもない、或る特殊の圖書館を設けよといふにある。普通の圖書館は、必ずしも此等の有力者を待たぬ。どこの圖書館にも有觸れた圖書を集めることを繰返すのならば、假令幾十萬の數を寄せ集めても、それは敢て誇りとするに足らぬ。富豪にあらずんば集め得ざるもの、いひ換へれば普通の圖書館の力の及ばざるものを集めてこそ、現在の圖書館の闕を補ふことにもなり、經營甲斐のあることなのだ。私のいはゆる特殊の圖書館とは、これをいふのである。岩崎家の東洋文庫は、某外人が特に東洋に關する古今の圖書を集めたのを譲り受け、それに同じ部類の多くの圖書を附加したもので、東洋研究の資料を多く有する點において到底他の圖書館の及ぶ所でない。こゝにおいてこの文庫に意味があり、その經營が徒爾でないのである。私は富豪に岩崎家にならへというた

が、それは文庫を起こす事を傲へというたに過ぎぬが、更に特殊圖書館を起こすことをも傲へと勸告せねばならぬ。もし追々富豪が美術にあれ宗教にあれ産業にあれ工藝にあれ、思ひ／＼に特殊の圖書館を設けるとなれば、こゝに分業が成立して普通圖書館の缺陷も補充し、普通圖書館も自然蒐集の區域を狭め、その主とする所に専らになることが出来る。到底一圖書館で萬能なることは出来ぬ、特殊圖書館を綜合してこそ、初めて萬能に近いものとなるのである。

珍書調査と臺帳

特殊の圖書館が將來盛んに起こり、それと普通圖書館とが、分業的に互に闕を補ふことになれば、や、圖書館萬能に近いものになるであらうが、しかしそれがために日本の有するあらゆる圖書が開放的地位に置かれたといふことは出来ぬ。日本には隠れてゐる圖書が頗る數多くある。書名も所在も知れてゐるものもあり、書名が知れて所在の知れぬものもある。書名の全く知れないもので、或る所に潛み、それが頗る珍奇で大切なものもある。特殊圖書館が起これば、それにつれて何かの因縁で其隠れた或る部分のものも舞臺に現はる、かも知れぬが、實は特殊

圖書館を作る事と隠れた圖書を現はすこと、はおのづから別問題に屬する。されば如何にして隠れた圖書を現はすかの問題について攻究するの必要がある。この問題を解決するに非ざれば、日本の有する大切な圖書を、隠れてゐるゆゑを以つて全く逸するの嫌ひがある。

さてこれを如何にすべきかといふに、結論をいへば極めて簡單である。その隠れたものを徹底的に取調べて、その書名、その時代、その著者、編者、その所藏者、その書の略解題を録し一部の臺帳を作り、これを適當の場所に備へ、研究家の縦覽に供することである。かくすれば、如何なる時代の、如何なる書物が、どの方面にあるか、直ちに分明して、文化を裨補するの端がこゝに開けるのである。研究家はこれにより長く尋ねて知り得なかつた其の所在を知ることが出来、或は思ひも寄らぬ好資料のあることを初めて知ることも出来、便利を得ることが甚大であらう。これが隠れた圖書を世に現はす一法である。慾をいへば、謄寫して副本を作りたくもあり、或は刻して世に流布させたくもあれど、それはなかく、容易の業ではない。最も簡單で勞費を多く要せず實行し得るのは、差向き臺帳を作ることである。

かく結論をいへば如何にも簡單である。謄寫本や刊本を作るのに比べればたやすく行はれる

とはいへ、實地に臨んで多少の面倒がある。第一、書名も所在も知れてゐる圖書は、概して著名のものでも圖書界には大略ながら書目も存してゐるから、これを臺帳に録することはあながち困難でないが、第二の書名のみ知れて所在の知れざるものと、第三の書名も何もかも知れないものに至つては、さながら雲を攫むが如きもので、氣根よく寺社や舊家や藏書家について調べる外に手段はない。圖書に經驗のない人は、諸家についてその藏書目録を調べたら、およそは分るだらうと思ふでもあらうが、實際さう簡單には行かぬ。その譯は、圖書のある所に必ず藏書目録があるとは限らぬ、假令あつても、全部の圖書が載つてゐるか否かも分らず、素人の作つた目録は大抵役に立たず、又目録だけを見ても書物の價値は知れかねるから、どうしても實物について調査を遂ぐる要がある。大抵何れの方面においても希觀書を藏する所には、因習的に重きを置くものがあるけれども、實地について見ると案外つまらなかつたりする、その代り軽く扱はれてゐた藏書の内にかへつて珍籍を發見することもあり、或は圖書に全く無理解の舊家においては、珍書奇籍を藏しながら、ほとんど一切を辨ぜざるものもある。總じて珍奇の逸書は、刊本は極めて少く、多くは鈔本であるから、或は書名を缺くものもあり、その體裁

甚だ整はず、反故に近いものもあつて、それが兎もすると非常に年代が古く、且つ名家の自筆稿本であつたり、世に稀な記録であつたりすることがある。かくの如きは、相當の能力ある専門家にあらざれば判じ兼ねるものであるから、この調査は決して容易でない。

ただ幸ひにも以上とほゞ似通つた調査を永く續けた先例がある。それは即ち帝國大學に附屬してゐる史料編纂事業である。この事業の大要は、官府の力で諸家の藏する隠れた史料を借り受け、それを謄寫編纂するのであつて、永い間の繼續事業であるから、そのすでに得た史料も夥しい數に上り、史料の備はつてゐる方面には殆んど觸れぬ所がないまで行き渡つてゐる。この蒐集は主として史料にあるので、それに關係のない圖書はこの編纂所の干與せざる所であるけれども、史料となるべき圖書の存する所には、他の圖書も亦存在すると推定しても不可なく、史料編纂係の多年の經驗に聞けば、某寺、某社、某家にはおよそ如何なる圖書があるか位な見當はつくべく、又史料編纂係が史料として抄録した其の原書それ自身は、概ね臺帳に登録さるべきものであらう。兎も角この編纂事業が先驅をなしたることは書目臺帳を作るに非常の便利を與へるもので、愈々臺帳を作るとなれば、この編纂係とは密接の交渉あることはいふま

でもない。

調査方法

修史編纂について學び得た一事は、官府の力に頼らざれば書目の取調べも出来かねることである。書目を作ることは必ずしも史料におけるごとく原本借受けを要するものでないけれども、その秘藏を取調べるにつき、諸家を煩はすことにおいては史料の場合とあへて異なる所がない。随分壟藏家が面倒がり、或は人によつては公表を忌み嫌ふものがないにも限らぬから、どうしても政府の力でやらねばならぬ。若干の審査委員を要するが、それも政府が囑託せねばならぬ。相當の經費を要する、それも政府から支出せねばならぬ。審査の規程も定めねばならぬが、史料編纂の規程と、國寶審査規則を參考して作れば容易である。そしてこの事の主管が政府のどの官廳に屬するかといふに、文部省たるべきは當然であると思ふ。

全國に散在するあらゆる圖書を取調べるといへば、頗る廣汎の區域にわたり、非常に煩はしい様に聞こえるであらうが、實際はそれほど煩はしくない。第一、普通圖書館に備はつてゐる

やうなものは、手に觸れないでよいのである。刊本にせよ鈔本にせよ、これが大数を占めてゐる、それを控除するとなると案外に数は少いのである。殊に史料を蒐集する事業に較べると、甚だしく難易の相違がある。彼にあつては圖書を精讀する必要がある、なほその上に必要の部分を抄録せねばならぬ。或は一部の圖書を全部寫し取らねばならぬこともある。それがために圖書を借り出す必要もあり、謄寫のため巨費を要するは勿論の事である。

これに反して圖書の調べにおいては、臺帳に登録すべき圖書を稽查鑑別し、その書名を録し、著者のわかつてゐるものはこれを録し、不明のものはこれを缺き、年代のわかるものはそれを録し、不明のものは推定して録し、内容については細述の必要なく、たゞ大略どんな種類の事が書かれてあるとほゞ問題を附すれば、それで足りるのである。これ位の事は圖書に普通の委員は即座に辨する譯だが、併し圖書によつてさう簡單に行き兼ねることも幾許があるであらう。内容について即座にノートの取れぬものや、年代の推定が困難で審議を要するものなどは、僅の日借出しを要することもないとは限らぬ。しかし恐らくこれは極めて稀であらう。史料調査に比すれば、難易は同日の論でない、従つてはかどりも早く、經費も決して多く要す

るものでない。

大體この審査は足を舉げて出張を要する。北は奥羽、南は九州までも漁らねばならぬが、しかし出張を要せず、居ながら書名の登録の出来るものも少からずある。たとへば岩崎家に藏してゐる宋元版の如きは、舊藏者がすでに解題を作つて居る。なほ同家の希觀和本の解題も出来てゐる筈。足利文庫の藏書も同様であるし、加賀の前田家などでもその道の人が調査をしてゐるから、凡そは分つてもゐる。内府の圖書寮においても専門家がその員に備はつて調査をしてゐるから、これも凡そ分つてゐる。なほ修史編纂掛にも永らく調査した結果が備はつてゐるに相違なく、圖書で圖寶に指定したものは文部省に登録してある。凡そこれ等の類は必ずしも實物について稽查を遂ぐるまでもなく、それ〴〵を寫し取ればそれで間に合ふであらう。要するに、専門家が置かれて圖書の整理を擔當してゐる處の藏書の取捨選擇は大體樂なものとするところが出来る。

出張の煩を省く一法として、廣く天下に登録臺帳を作るの趣意を宣布し、任意にその所藏書を届け出でしむるもよからう。實は紛々たる個人が密かに少數の珍書を有する方面の如きは、

知れ難いものが少からずあつて、全く見當が付き兼ねる。審査委員が出張を厭はないとしても、その先きが判然しないから、これ等に對しては自ら名乗らしむる外はないが、必ず原物を提出せしむること、したい。

圖書の選擇についての細目の如きは、こゝに縷述の煩を避けるが、すでに版に刻され或は活字で印刷されて流布してゐるものでも、その著者の稿本は勿論、稿本にあらずとも、舊鈔本は取らねばならぬ。又異版、異本の如きも、取るべきものがあらう。流布本のあるゆゑを以つて、これ等を閑却すべからざるゆゑんは、流布本は整版と雖も訛謬が少からずある。活字本においては最も正確を失してゐる。例へば諸家の記録の如き、その著名のものは活字本となつてゐるけれども、もと轉寫本を底本としてゐるから誤りが多くあつて、研究家を惑はすことが非常である。

古書の尊いのはその原本にあるけれども、原本は多く門外不出のものであるために、容易に見ることが出来ない。昔は別してさうであつた。新井白石が某堂上家についてその家の大切な記録「人車記」を見せては貰つたが、その時は主人自身庫から取出して來て、人拂をして内證

にこれを示し、且つこれを見た事を口外されては困ると、口留をした位祕密にしたものであつた。そんな譯だから、伴信友のごとき考證家で、悪寫本「扶桑略記」のために大和の長谷寺の創立年代を誤つたこともある。原本若くは原本に近いものが如何に大切であるかの一例として、こゝに今一つ近衛豫樂公のことを挙げる。公は「唐六典」を幾年もかゝつて嚴正に校正して自ら版にされた。それが今流布してゐるが、當時「唐六典」の佳本が容易に手に入らず、公の藏本には訛謬が少くなかつたので、公はみづから六典に引いてある原本にさかのぼつて校訂され、毎ページ眞赤に朱が施された。その勞力は實に大なるものがあつたが、やつと校訂が済んだ頃に、佳本が初めて手に入つたので、それと對照して見らるゝと、すべて直した通りであつたので大いに喜ばれたとあるが、同じ版本でもこんな相違のあるものであるから佳本は實に大切である。公が初めに佳本を手に入れられたなら、あたら精力を幾年もこの一書に注がれなかつたであらうに。

一種の保存獎勵

談は少しく横道に入り過ぎたが、本體に戻つて、全國の隠れた圖書の所在と書名とが知れたとすると、それを部門を別つて適當に編纂して、臺帳に登録するのであるが、出來得べくんばこれを印刷に附して、廣く必要の所に頒布したいものである。然しこの目録は多分浩漭のものであらうと思ふから、或は經費の關係などでそれが出來ないかも知れないが、臺帳だけは作り上げねばならぬ。そしてそれをどこに置くかといへば、文部省に置くべしといふ説もあるかも知れぬが、閱覽者の便利を考へれば、文部の直轄に屬する帝國圖書館に備へ付ける方が寧ろ便利であらう。

登録を経たる書物について洩らすべからざる緊要の事がある。それは所藏者が變更し従つて所在が移動する場合を如何にするかといふことである。臺帳の最も大切である意味の一つは所在の明記されてゐることであるのに、それが賣買讓與等のため移動するとなると、臺帳は當てにならぬものになる。始終所在の正確を期するには賣買讓與を禁ずることも一案であらうが、人の私有物にそんな干渉は出來ないとすると、移動の都度その事を届け出でしむることだけではどうしても實行せねばならぬ。勿論審査の結果國寶たるべきもの若くは國寶に準ずべきものを

發見したとすると、それが或は國寶に指定さるゝこともあらう。その結果矢鱈に賣買も出来ないことになるであらうが、少くとも賣買の場合には官廳の許可を得なければならぬことになるのであるが、大體は登録のゆゑを以つて藏書を拘束することを避けたい。

それにしても一旦登録を経ると自家の私有物が勝手にならぬやうに考へて、登録をいやがるものもあるかも知れぬ。しかし臺帳の登録はその書の珍奇希覯を裏書してこれに價値づけるものであるから、案外喜んで登録を欲するかも知れぬ。もとゞゝ大切なものは滅多に賣る氣がなく、これを手離すは萬已むを得ない時であるから、この登録は所藏者にその圖書の保存を獎勵することになるであらうと信ずる。

大切な文化事業

全國に散在する圖書が、震火災その他の災害で亡びたものが少からずある。或は無理解の手に渡つて反故として取扱はれて亡びたものもある。これ等の中には今日の識者が一たびも寓目せず亡びたものがどの位あるか、殆んど測量がつかぬ。なほ又外國人に購はれて海外へ持去

られたものもまた莫大である。毎々洋行者のいふことであるが、外國の博物館や圖書館あたりで、内地では到底見られない日本の古書がいろ／＼陳列されてゐて、こんなものがあるかと一驚を喫し、今更それ等の輸出を残念がるものがあるけれども、今は如何ともし難い。これ等輸出については種々の原因があるであらう。外人が高い價を拂ふからといふそれに釣られて、ムザ／＼と日本唯一のものを副本も取らずに出したのもあらう。書物屋などの手から外國に傳はつたものは商賣上已むを得ないとしても、ある混沌時代に古書などを全く理解せず、殆んど外人の取るに任かせたこともないでもない。如何にも取り返しのつかぬことをして惜しいことであるが、これも畢竟自家の藏本がどれほど珍奇で、どれほど貴重であるかを知らないのに坐するのだから、登録臺帳を作ることは、これ等圖書に無理解の人のためにも必要である。即ち臺帳の登録は濫りに圖書を失ふことを防止する一方便となるであらうと思ふ。

若し夫れこの臺帳が各方面の研究家にどれだけの便利を與へるかといふに、圖書の校勘や校訂や編纂などに實地當つたものには、直ちにその效の頗る大であることが理解される。私も前年埼檢校の編纂した「羣書類從」に倣つて、圖書刊行會を起こし、未刊の圖書を幾千部となく

出版したことがある。その際につくづく感じたことは、先づ貴重の佚書が何であるかを知るに困難を感じた。書名が知れてゐても、それがどこにあるか、知れないので困難を感じた。更に校訂をなすに當り、正確若くは正確に近い底本を得るに困難を感じた。古書は多く零本となつてゐて、あちらこちらに散在し、藏者が異つてゐるので、それを寄せ集めることにも困難を感じた。さうした場合にこの臺帳が備はつてゐたら、如何に便利を感じたであらうか。「東大寺要録」の如きは、如何に搜索しても一冊だけの所在が知れず、やむなく断念して、版にしてからであつたか、版にせんとする時であつたか、(刊行會本が坐右にないから)はつきりいへないが) ャット所在が知れたことがあつて、やれ／＼というたのなどは、ほんの一例に過ぎぬ。

この登錄臺帳を作ることは私一個の私案でなく、前年同人と共に文部省に建議して實行を促したことがある。文部省はこれを可としながら、國費の都合で今日までも實行しないが、文化のために大切な事業である。これを行へば隠れた圖書も初めて世に出るし、死藏されてゐる圖書も初めて活動の機會を得る。これがために圖書館の不備を補ふことも出來、將來に起るべき特殊圖書館と共に圖書萬能の働きを實現するには、速かにこれを實行することが極めて大切で

あると信ずる。

二 高麗藏經に就て

書物の趣味が向上すると、遂にお經にまで赴くのが順序である。つまりお經は、書物の残つてゐるうちに最も時代が古いからである。私は聊か高麗版大藏經かうらいほんに就て小話を試みようと思ふ。

高麗經は日本にもボツ／＼ある、就中尤も有名なのは、京都建仁寺けんにんじに在つたものだ。一體高麗版にも精粗の二種がある。精なるものは紺地の表紙がついて居り、普通の流布本は朝鮮特色の茶表紙のものである。建仁寺のものは紺地のもので、日本に於ける一番佳いものであつたのに、前年經藏が火災に罹つて大部分烏有に歸したのは遺憾の極みである。東京では、芝三緣山しばさんざん増上寺の高麗版一切經が最も名高く、殊に宋版も元版もあつて、高麗版と共に三大藏と稱してゐる。元來増上寺は徳川家の菩提寺であるから、此の三大藏は家康の威力で諸方から最上の藏經を取上げたものである。即ち三緣山の三大藏目錄の序に徴するに、宋本はもと近江の管山寺

に在つたもの、元本は伊豆の修善寺へ平政子が納めたもの、高麗本は大和の圓成寺にあつたものとある。いつぞや修善寺を訪つた折、平政子の署名のある零巻を見たが、それは即ち三縁山藏經の姉妹巻である。寺に就て、此經巻を増上寺に譲つた爲め修善寺にはどれ程の報酬があつたかと聞いたら、御朱印を賜つたと云ふことだが、實は其の御朱印は中有に迷つて寺に來ないと云うてゐた。

増上寺の三大藏は同寺に最も大切なものであるから、維新の變亂の起つた時、兵燹に罹つてはならぬと、特に川越かはこえその他の二三の寺に移して鄭重に保護したと、いつぞや増上寺で三大藏を一覽した時寺僧から聞いたことを想ひ起す。尙ほ其際三大藏曝書のことを寺僧から聞いた。

その大要を云ふと、昔し此寺の學寮は學徒三千と稱して、頗る盛んなもので、従つて學識ある僧も多くゐた。そこで曝書の折には、其多數の中から成るべく老年のものを、確か十六人かを選んで、一週間交代に日出から日没迄擔任させた。此の選に當つたものは、齋戒沐浴して、第一日より第七日まで十六人が分課して、重なる老僧が立會の上、相當の儀式を以つて行つたものだ。渠等は直立三禮し、一卷づつを手を把つて繰ること、恰も田舎の禪寺で今日猶ほ行つて

る、大般若だいぼんぎやうを繰ると同じやり方で風を通した。何故年の若い者を避けたかと云ふと、若いものは粗略ざろつがあるからといふ用意から來たのである。

版本藏經の内が高麗經が最も重じられる所以は、單に時代が古いといふだけでない、其校勘の精に於て前後無比であるからだ。但し是は高麗高宗の勅版再刻本を指して云ふのである。それも今から九百十五年前に高麗の顯宗が崔士成に勅して見行の藏經五千餘卷を開雕した、尋いで文宗の時に「續貞元錄」に收めてあるものと宋代の新譯とを新雕して増し加へた、前後總計六百三十九函六千五百五十七卷に達し、其經版は之を符仁寺に藏せしめた。處が其れが高宗の朝に至つて蒙古兵の兵火に燒失したので、高宗は其二十三年丙申（我が嘉禎二年）から三十八年辛亥（我が建長二年）に至る十六年間に李奎報等に命じて之を再刻した。其際守其しゆしといふ博學の法師があつて、宋本と契丹本きつたんぽんと高麗初刻本との三種の藏經を比較對照して微細に參訂校讎した。此の時の「校正別錄」が三十卷あるが、それを繕くと、當年苦心の迹を見ることが出来る。これが無二の佳本と云はれる高麗經で、其經版は見海印寺の藏經閣に保存されてゐる。さて斯う高麗朝で前後二回までもかゝる驚く可き大出版を營んだのは、全く外敵調伏の發願に出た

のだといふ事だ。それでこそ國帑を糜した意味も領かれる、手もなく今の軍備擴張と同格なのだ。

大藏經は非常に大部のもので、其の一部を有するすら寺の誇りであるのに、三緣山が稀れる佳版三部までも併有してゐるのは、流石に徳川氏の菩提寺だけある。斯る貴重な經を所藏する結果として、元祿の頃、同山に學識の高い僧があつて、高麗經を熱心に研究し、遂に京都に出て、此經を基礎として諸名利につき、あらゆる古經を照合した末、高麗版が一番正しいと斷じ、多年研究の結果を、「校勘錄」と題して、三緣山から上版した。其冊數は百に上り、佛典界に破天荒の大功德を與へた。此「校勘錄」は、高麗經と共に三緣山の誇りとする所である。

右高麗經の版木を藏してゐる海印寺は慶尙北道陝川郡伽耶山中に在つて、各市邑から茲に到るには、随分困難な道程ではあるが、京城から行くには、大邱驛から百三十韓里、高靈、冶爐を經て行くのが、尤も便利だといふ。同寺は今を距る千五百餘年前新羅哀莊王の第二年名僧順應の創立に係り、其後數回の火災に罹り、現今の伽藍は百年程前の重建で、昔は現存のものよりもズット規模が大であつたと云ふ。藏經閣は二棟あつて、これは李朝に至つて改造されたも

のだが、大藏經版は高麗朝に出來たま、藏してある。其數八萬六千六百八十六枚で、五層の版架に毎層縦に二列に配列し、中央の版架及び壁際に設けたる大なる版架は、猶ほ前後左右から排列する事、恰も洋風の書架に書籍の排列してあると同様である。此寺は朝廷の勅願寺の一で、特別の扱をしたものだが、彼の文祿の役には、多くの寺院が大概荒らされたのに、此寺丈が幸にして免かれた。其理由の一つは、山奥に在つたから見逃された譯であつた。本寺は前述の通り火災の爲めに焼け、従つて種々大切な文書は消滅したが、幸に經藏丈満足であつたので、經版の現存してゐるのは實に喜ぶべきことである。申すまでもなく、これは朝鮮の國寶である。

三 古寫經趣味

既に高麗藏經に就て説いた因縁から古經の趣味にも及んで見たい。古經には版經もあり、寫經もある。共に圖書の部類に屬するものであるが、最も古い時代に溯り得るものは寫經である。昔天平あたりの古經の容易に獲難かつた頃には、好事家は其一行を得てすら雀躍して喜ん

だ。屋代弘賢が武州慈光寺のせみず小水磨の貞觀經尺餘を得た時などは、ひどく喜んで、一行づつ、切つて同人に與へて其喜びを頌つたことがある。

日本で最古の版經は寶龜版の四種の陀羅尼である。其大きさは竪二寸、幅一尺位で、聖武帝が百萬塔に納めて方々の寺刹に置かれたのがこれである。これが世界最古の版本と云はれてゐるが、近頃支那で稍々時代の近い版本を掘り出したと云ふから、これとそれとが世界最古のものであらう。寫經となると、天平頃のものが澤山残つてゐる。支那から來たのもあり、日本で書いたものもある。久しい間天平以前の寫經は絶對に無いかの如く思はれてゐるが、法隆寺から、天平より六十數年前、即ち白鳳經と見るべきものが出た。それは偶然私の手に歸したが、これには年號を闕き、干支のみ書かれて、白鳳と見るべき特徴は、「河内國志貴評」とあつて、郡の字に「評」と云ふ字が用ゐてある。白鳳年間に出來た金石には郡の字は皆な評となつてゐる。大和の法金剛院の鐘銘や下野國造碑にも同様の字を見る。嘗に此特徴がある計りでなく、白鳳年間に建てられた、大和の長谷寺の佛像の臺座に刻されてある字が、此經と全く同筆で、干支まで同一である所から、當時同一寫經生が書いたものに相違ないとさるゝに至つた。

書體は天平に較べると一段莊重であつて、そこにも特徴がある。これが日本に現存する寫經の最古のものである。これより稍古いものが二三日本にあるけれども、それは支那出來である。此の白鳳經は金剛場陀羅尼で、一卷經まつてゐるが、これと同時代同筆のものが他に絶對に無い譯ではない。いつぞや田中青山伯から、多く貴重寫經を示された時に、私のと同様のもの、ある事を發見した。併しそれは斷簡であつた。

白鳳あたりの古經には、おのづから超越した趣味がある。併しこれは頗る希觀のものであるから、普通古經の趣味を語るには、寧ろ數の多い、天平經に就てする方が適當であらう。天平の寫經の内には、聖武帝と光明皇后の願經が少からずある。此等の經に就て何人も趣味を感ずるのは、其の經卷に收めてある識語で、佛に祈るの意は何人も同じだとしても、流石に帝者の祈願文には堂々たる趣があつて、一誦容を改めしむるものがある。當時如何に佛教が盛んであつたかは此等の識語で看取せらるゝ。支那にも帝王が祈願の爲に納めた寫經が少からずある。それが當時日本へ持來られて、其の經の末尾に聖武帝並に皇后の識語を加へたものがある。これは寫經の煩を省いて他國の寫經を應用したのであるけれども、帝者の識語が連なつてゐる所

に一種の趣味がある。

寫經の中には、天子皇后の宸翰、高貴の人の直筆もないではないが、多くは寫經生の筆したもので、帝者の願經を書くには最も熟達じゆくたつの寫經生を簡拔したから、如何にも立派なものが多
い。寫經生と云へば輕んずる人もあるか知れんが、決して馬鹿にならぬ。私の友人が曾つて手
に入れた、本願寺舊藏ほんがんじきゆざうの首楞嚴經しゆりやうこんぎやう（天平）などは實に堂々たる書で、寫經生の名が山部諸公やまべしよこうと
明かに書いてある。これは藥師寺や醍醐寺にある經と同様のものである。同じ友人の所持して
ゐる根本百一羯磨こんぽんひやくいつかま第八卷（天平十二年願經）は、これも名高い筆者の書いたものだけに、唐人
を壓するの趣がある。

寫經生の筆ですら頗る味ふべきものがある。況んや空海や良辨らうへんや最澄さいさうなどの高僧が書いたものになると、更らに立妙の味を感じざるを得ない。斯る高僧の筆の跡は、寫經にこそ稀れに存
すれ、それを離れては多くの場合残つてゐないから、頗る貴いものである。かの國寶になつて
ゐる仁和寺の三十帖冊子てんわじさんじふしちゆうは、空海入唐の折寫字生に書かせた側ら空海自身も助筆したと云はれ
てゐる。寺の傳では稀逸勢はゆなりの助筆も加つてゐるといふが、これは覺束ない。兎も角も空海の正

しい筆が此冊子にあるとなると、其一行でも貴いことは言ふまでもない。世には菅公自筆の經があると言つてゐるけれども、今の鑑識家はそれを許さない。大概は當時の寫經生の筆に相違ない。併し其時代が時代だけに、そこに相當の趣味があるのである。

書の外にもいろ／＼味ふべきものがある。先づ用紙である。麻紙もあり、穀紙もあり、また茶毘紙もある。光明皇后の願經などは重に穀紙を用ゐてゐる。穀紙は色が白く奇麗であるから、成るほど女流の好みには適つてゐると首肯される。茶毘紙は茶色を帯びた脆い紙であるが、これには線香珠が籠き込まれてゐるので、宗教味が感ぜらるゝ。

軸の形式にも種々あるが、時代によりそれ／＼特徴もある。檜材のが普通で、水晶、紫檀などの類もある。軸の兩端が色漆に塗つてあるのが普通だが、密陀みつたというて、ペンキのやうな塗料を用ゐたのものもある。又經卷に罫を引くには鉛筆を用ゐたらしい。天平の當時早く鉛筆のあつたことは、其實物が正倉院に存してゐるのでもわかる。金泥や銀泥を解くに膠を嫌つたと云はれてゐる。獸類の脂を忌んだのも無理ならぬ事であるが、それに易へるに何を以つてしたか、豆の精などが代用物の一つであつたらしい。

以上を外にして經卷の表装の種々の違ひや、打紐のことや、經の外部の題署や、扉の内外の繪や、經卷の紙の地模様や、帙や、經函きやうくわんなどに就て研究して見ても、少からず興を覺えることがある。例へば、前に擧げた百一羯磨の軸付を見ると、其餘白に山部一校小野などの字がホンの二三字存してゐる。それを「大日本古文書」に就て調べて見ると、筆者山部は花麿であることがわかり、又同書二ノ二九二頁を見ると、此人が紙四百枚を受取つたことが書かれてゐる。こんな工合に分ると、言ひ難い興味を感じ、寫經道樂もやめられないことになる。千年前のことがツイ先達ての事のやうに感ぜられて、面白くなつて來る。

これに就ても古い文書の表装には意を用ゐるべきだ。大抵經卷きやうくわんの卷留まきどめの餘紙は、表装の際切り棄てるのが通例であるから、筆者の覺え書などはその爲めに多くは失はれてゐる。此の百一羯磨の卷尾は幸ひにウブに保たれた爲めに筆者の事が知れるのである。若し普通の場合の如く、殘紙を裁ち切つたとすると、千歳の後、誰れか筆者を知るを得べきぞ。殆い哉。

四 六朝文書を觀るの記

西本願寺の光瑞師が、支那の西域即ち今の新疆省邊から、多くの六朝乃至唐代の珍什を獲て歸つたことは誰れも知る事實で、今は敢て珍らしくもないが、此の珍什が本願寺に着した、其當時、文學博士内藤湖南氏が其整理を託されてゐたので、内藤氏の好意で私が一番早く閱覽することが出來た。當時私は鉛筆でノートを作り、それを旅館で匆卒書き散らしたものがある。最早二十年前の既往に屬し、頗る覺束ない書き留めではあるが、多少鶏肋の感もあるので、爰に聊か補筆して掲げる事にした。

私は東本願寺を訪うたことは度々あるが、西本願寺を問うたのはこれが初めてであつた。寺僧の案内で先づ保護建造物を見た。言ふまでもなく、昔し豊公が豪奢を極めた名残りの建物が爰に移されたので、鴻の間と稱し、疊四五百枚も敷くべき大規模のものである。當時豊公が列侯を引見したのは、即ち此室であると思ふと、低徊去り難い感興が湧いた。書院傳へに四五の室が連なつてゐる、皆な桃山の遺物で、其の襖や格天井の華麗さは眞に驚くの外はない。

廊下を通り抜けて奥まりたる一室に到ると、爰に内藤氏は先着して、私の來るを待つて居られた。氏は紹介者であると共に説明者でもあつたので、非常な仕合を得た。

先づ寓目のものを分類すると、左の四類となすことが出来る。

一 文書

二 繪畫

三 器物

四 金石

廣い室に置かれた種々のものが數百點の多きに及び、時代は六朝から唐代に迫んでゐる。發掘地は所謂西域即ち今の新疆省の吐峪溝邊である。此邊は沙漠地で、昔しの城墟でもあるが、石壁を掘り崩すと其中から、土砂に交つて種々のものが流れ出て來る。土砂に深く埋藏されてゐるが、幾んど雨のない所だから、埋藏品も皆な乾燥してゐて、文書でも繪畫でも、皆な今書いたやうに繪の具もそのまゝに存してゐる。到底濕氣深い日本の頭腦を以つては想像が出来兼ねるものだ。

第一類の文書は經文が多きを占めてゐる、論語や左傳などの經書の斷片も交り、書簡や借用

證文や、木片で作られた逮捕状などもあつた。此等の文書の内に發掘の際損したものもあるが、完璧のものも少なく無い。何と云つても李栢の書簡が最も珍奇のものだが、幸に此書簡は完璧である。

今左に私が特に意を留めたものを列記し、聊か注を加へよう。

一寫經　元康二年の款識がある。これは西晉惠帝の年號で、紙は麻紙、輪廓と野は鉛線ではなく墨線である。輪廓の天地には唐以後の經のごとく、多く餘地を存しない、これが一つの特徴であると思うた。書は隸楷混合で頗る特徴がある。總じて此頃の經は隸體が多く、楷體のものでも隸味が交つてゐる、過渡期の書體の趣が看取される。

一經書　論語の斷片は唐代のものか、天子の諱の民の字を忌み、代へるに人の字を以てしてゐる。又今の版本とは異同がある。史記、漢書の斷片も、書體を以つて判すると、唐代のものと思はれた。史記は仲尼弟子列傳の斷簡で、漢書は張良傳の一節であつた。左傳の斷片は成公十七年の條で、矢張り唐代のものと思つた。

一書簡　では李栢のものを第一に推さねばならぬ。これが二通あつて、共に完璧である。

他にも、李の名の散見する、同じ書風の反故が一括りあつた。此の李栢は晉書の八十四卷に出てゐる人で、時代は東晉の初、今を距る幾んど千六百年に溯る。王羲之とは同時であるが、李栢は寧ろ先輩である。此人は武弁で、焉耆王の麾下の人であることが晉書で知れる。現に此等の書簡は皆焉耆王に寄せたもので、武弁の書だから、敢て巧妙とも言ひかねるが、時代は争ひがなく、どことなく羲之の筆意に似通つた所があるかに見受けた。天地間に正書なしと云はれてゐる羲之と同時代の人の正書が存してゐて、臙ろけながら羲之の肉書を想像し得ることは一興である。此書簡の紙は我邦の檀紙に似た厚い強いもので、書は行體であつた。此書簡はエンチダリヤより發掘したとある。

一 借用證文　二通の内一通は完全で、年號は大曆十六年とあり、借川主は楊三娘で、紙尾に舉錢人、保人が列記されてゐる。舉錢人は貸主で、保人は保證人であらう。何れもその年齢を記してゐる。楊三娘とあるのを見ては、我が藤三娘を聯想せねばならぬ。藤三娘は我が光明皇后が自書の樂毅論に署された名であることは云ふまでもない。總じて證文の體裁、文字、用紙共に吾が天平文書の面目があるのは同時代であるからだ。他の一

通は文言が完くない、併し唐代の書で、矢張り大曆のものであると思はれた。此の二通はクムトラで獲たと聞いた。

一逮捕狀 幅三寸程の木片を薄くへぎ、其一面に楷書で細記があれば讀み兼ねた。今も支那では罪人の逮捕狀は紙に認めず、木片を用ゐるといふが、これは書體を以つて判するに、恐らく唐代のものであらう。

以上の外に少からず經卷があつた。六朝の經卷などは容易に觀られないものであるのに、ここには幾十卷を一束にしてあつて、其の豊富なるに驚かざるを得なかつた。書はすべて楷書であるが、一字の内必らず或る一畫だけ肉太に書いてあるのが此頃の特徴で、もあつたらうか。どの卷を見ても此の趣があつた。書は唐經に較べると整つてはゐないが、どこかに氣魄があるやうに思はれた。唐代の經卷は殊に多くあつたが、これは吾々も見慣れてゐるもので、我が天平經と格別の違ひがない。すべて書體は圓熟して、六朝經の如く粗笨の處がない。

第三類の繪畫は大體佛畫であつて、其十中の八九は絹本に畫かれてあり、何れも金碧燦爛たる極彩色である。乾燥の砂地に久しく埋もれて、絹地が多く裂けてゐて、完璧のもの、少ない

のは惜むべきであるが、描法の一端を窺ふには十分である。何れも唐代のもので、六朝のものは存してゐなかつた。

さて其寫目のもの二三を舉げると、天寶十載辛卯正月某日縣君和氏供養と楷書の款識のある佛畫は、着色が如何にも精細であつた。これは絹を二枚縫ひ合はせてある、その縫目を調べて見ると、我國の所謂のフセ縫ひで、極めて巧みである。又吾が鹽瀨とも見るべき厚地の絹に畫かれた佛像は其面貌と衣裳の一端だけ存し、金碧燦爛の美を盡し、殊に金泥で書いた細紋が精を極め、顔面には隈取りがあつた。表装されたものらしく、幾許かの紙が背面に附着してあるを認めた。又他の一枚は薄絹で、矢張り断片であるが、羅漢風の僧が剃刀を取つて他の一人の髮を落すの圖が書かれてゐた。これにも絹が縫ひ合はされてあつて、縫合せ方は前と同じである。又他の一枚には羅漢の圖像があり、其の背景に水墨の山水のあるのを見て、王摩詰ちまきなどの墨畫はこんなものであらうかと、少からず興味を覺えた。此山水などは恐らく南北の未だ分れない頃の筆であらう。畫家の研究資料に供して頗る價値あるものだ。又小品では、色紙大の絹本に悉達太子したたが馬に乗つて門を出る圖がある。門前には二人の阜隸ふじが擔架に死者を載せて擔

いでゐる。これは恐らく四苦を觀する四枚の圖の一であらうが、幸ひに毀損もなく、唐代の風俗が知れて參考になるものと思はれた。又一枚の斷片には二人の人物の面貌と其の胸邊が畫かれてゐたが、此の畫風が全く吾が倭繪やまとえと同じく、吾が邦人の筆と見まがふ程で、一驚を喫した。倭繪だけは日本創意のものであらうと思つてゐたのに、これすら唐代の模倣であると思ふと少々心細からざるを得なかつた。又大曆六年四月十八日の款識ある菩薩ぼさつの面貌を圖した斷片があつたが、其の畫様は吾が因果經の繪に酷似してゐるのに趣味を覺えた。これには上柱國錄事雍義章供養とある、即ち獻納者の名で、大曆六年は中唐代宗の時である。又一斷片に佛像の面貌のみ存してゐるのがあつた。其の書き方に一特徴があつて、臉まぶたが大きく且つ重く畫かれてゐる畫様は常麻曇陀羅たいまんだら式で、吾が將軍塚縁起を聯想せしめた。

佛畫の外に二片の織物があつた。一は一見木綿と見ちがへる厚い布にいろ／＼の模様を織り出したもので、五寸餘の方形であるが、吾が法隆寺の四天王紋旗の裂きれによく似てゐる。他の一は繡佛で、廣東裂かんとうきれのやうな地に天女が琵琶を彈ずるの圖を刺繡したのだが、精巧驚く可きものである。天女の顔は眞圓形で、トルコ式とも謂ふべきものであつた。外に細もの二片、これも

刺繍を施したもので、其の精巧は我國の天平頃のものより優つてゐるけれども、其の趣は頗る似通つてゐる。又外に佛像を板に刻して、それを摺つたものが幾通かあつた。唐代にこんなもの、あつたのは珍とすべきである。すべて此種のは異教の行はるゝ所に、却つて早く興つた形蹟がある。

第三類の器物と第四類の金石は極めて要略を記すことにするが、器物は大體小品が多くを占め、佛像、古錢、印、指輪などの類が二百點も雜然と陳列されてゐた。六朝の特徴ある完璧の佛像も可なりにあつたが、土製の佛の頭のみ存してゐるのも多數あつて、其の面貌に研究の資料となるものを少からず認めた。此中に特に注意を惹いたのはギリシヤ式、ガンダラ式のもの、が四五あつたことである。天地佛もあつたが、マリヤの像と見るべきものもあつた。佛像の鑄^そ型の完全なものや、封蠟印もあつたが、封蠟印の内には洋式に酷似のものもあつた。又古錢の内には錢譜に嘗つて見ざるものが多かつた。概して此部類に西洋趣味の混じてゐる譯は、西教が早く此邊に行はれた影響であらう。第四類の金石は、碑板、石像、其他尺四方位な石片が數十の大箱に入れてあつたが、これは皆な燕京附近で獲たもので、西域將來のものでは無かつ

た。珍奇のものもあつたが爰には略する。

以上は閱覽記の大略である。私が之れを見て幾年かの後に、大隈侯に随つて西本願寺に光瑞法主を訪うた時、侯と法主とは共に起つて其の巨幹をそれとなく較べて、種々の談話が湧いた中に、法主は自分には道樂が無いと云はれたのを、私は横合より、あれほどの六朝物を西域より獲得されながら、道樂が無いとは受取り難いと云ふと、これが法主の急所に觸れたらしく、法主の云はるゝには、實は微力の爲めと西洋人に先手を打たれた爲めとで案外獲物が少かつたと云はれたが、それは謙遜の言葉で、日本では光瑞師が獨り擅にした大成功であつたのだ。西域は支那の邊隅で、支那人ですら容易に到り得ぬ處である。光瑞師の如き有力者であるからこそ、行きもし發掘もしたのである。此の旅行は冒險的のもので、現に法主は兵士に護衛された。幾百の馬に糧食其の他必要のものを荷はせての長い旅行であるから、其の經費は莫大のものである。されば早く探險の志を有しながら近年まで決行を敢てするもの、無かつたのも偶然でない。光瑞師の此の遠征は、實は時を得て幸運であつた。其頃までは支那は西域の舊物を外國に持去らるゝのを敢て意にも留めなかつたが、その後漸やく氣がついて、追々やかましくなつ

て来たから、光瑞師の二の舞を事實繰返すことが出来なくなつた。即ち光瑞師の擧は我が學術界に大なる研究資料を興へたもので、長く傳へて感謝すべきものである。

五 北越雪譜の出版さるゝまで

一 牧之と馬琴及び京山

雪の越後を初めて全國に紹介した好著として「北越雪譜」の名は其頃中央の讀書界に喧傳したもので、郷國の人は今に至つて尙ほ此書を珍重して居るが、殊に此書に關係したものが曲亭馬琴、山東京傳、同じく京山といふ如き當時一流の小説作家であつた點からも、一層世上に著聞したものである。自分は曾て郷里越後の南魚沼郡鹽澤村の鈴木家から此書の著者たる先代の鈴木牧之ぼくしが江戸の戯作者ひきましょ山東京山と往復した書簡集を借り受けて一覽したことがあるが、京山は半紙の野紙に手紙を書くのが例であつたものと見え、往復書簡の全部が野紙に書かれてあつて、それを綴つた冊子が二冊出来て居る。何れも百五十枚許りを綴つてあるから二冊で三百枚

近い大冊であるが、それを讀むとなか／＼面白い上に、「北越雪譜」の出版になるまでの経路が、至つて細かに書かれてあるから、雪譜編纂の小史とも見るべきものである。又單にそれのみでなく、牧之の事や京山自身の事、其他種々なる事柄が此書簡中に現はれてゐるので、自分は覺えず湧然たる興味に浸ることが出來た。そこでこれらの書簡を通じて窺ひ得た雪譜編纂當時の經緯いきまじを中心に、此兩人の友情や性格などに就て感じた所を叙して見よう。

鈴木牧之は天保の末頃まで在世した人で、生地なまのくにの越後南魚沼郡は郷人一般の知る如く雪で名高い北越の中にも特に雪の深い土地で、若しも越後に就て問はんとすれば、此地方の人をして答へしむるが最も適任といはねばならぬ。牧之はたまく／＼斯うした雪深い中に生れた。そして家には相當の資産も有し、又幼少から文藝に志があつて詩も賦する、狂歌も詠する、俳句も作れば畫もかくといふ、多才多藝の人であつた。既に文字に因縁深く文藝に嗜み淺からぬ當時の豪家としては、自ら吟詠して樂しむといふばかりでなく、更に遠近同好の士と文墨上の交りを訂するといふことは、全く自然の傾向であつた。牧之が夙に江戸の文人と書簡の往復によつて風流の交際を續けてゐたのも、要するに斯ういふ欲求に其端を發したものと思はれる。

所謂る文學が媒となつて、牧之は馬琴にも交はり、京山にも交はつた。其他當時江戸で著名な文士雅客とも書狀の往復で多く交際のあつたことは、鈴木家に藏する書簡に徴しても首肯されて、其交遊の廣かつたことに驚かされる。而もこれら多くの文人中に、最も交際を長く続け且つ親密であつたものは馬琴、京山の兩人で、此兩人に對しては親族以上にも親しかつたものらしい。

一年に何回といふ不便不自由を極めた當時の飛脚便によつて手紙の往復を續けたのであるが、双方から發する一通の手紙が、何れも半紙野紙拾枚位に亘つて居て、殆ど相對して歡談して居るかの如くに、時には文藝上の事計りでなく一家の私事についても隔てなく通信し合つてゐたのである。

二 京傳馬琴約を果さず

牧之が「北越雪譜」を世に公けにせんと志すに至つた動機は、當時江戸に於ける作者と交際があつたからにも因るであらうが、彼れは敢て著作家でこそなけれ、自分で畫も描けば相當文

章も作れる人で、且つ郷國の雪に興味を感じてゐた所から、何とかして全國に第一位を占むる郷里の雪を、江戸を始め九州邊の雪の多く積らぬ國に住む人達へ知らせたい。殊に雪國特有の風俗習慣、さては用具までも全國に紹介して見たいといふ考を起して、爾來其實現に努めたのであつた。

京山の兄で、馬琴の師に當る京傳と、牧之との關係は如何といふに、牧之が抑々第一に「北越雪譜」の著作を依頼したのが京傳であつた。其間の消息は委しく知らぬが、著作に經驗なき牧之は、京傳の如き文名を世に馳せてゐる著作家に囑し、之に材料を與へて代筆を乞ひ、江湖に其書を流布しようと謀つたのであらう。此想像は、後に馬琴に對しても京山に對しても自分の草稿をその儘出版して呉れと頼んだわけでなく、材料は牧之から提供する、執筆は著作家に任せるといふことになつてゐる點から考へても、必ず誤つた觀察ではあるまいと思ふ、即ち京傳にも矢張り此形式で委囑したものと推斷してよからう。

牧之が「北越雪譜」の著作を京傳に頼んだ時には、まだ玉山といふ高名な畫家も存命であつた。玉山は浮世繪師で、曾ては「大閤記」の畫をかいたので頗る名聲を博した人である。尤も

其「太閤記」は當時徳川氏の忌諱に觸れて、絶版となつたのであるが、其爲めに却つて玉山が世に持て囃さるゝことにもなつた。又鈴木芙蓉といふ畫家も居た。俗に木芙蓉もくふよう（鈴木の木を取つた略稱）とも呼ばれた人で、これが又越後へ遊んだことのある關係から、牧之はこれにも畫を託しようとした。即ち文章は京傳に、畫は玉山、芙蓉に囑せんとする段取であつた。これが抑々牧之が雪譜を世に出さんと謀つた發端である。

ところが京傳も机の上の甚だ多忙な作者である。受け込みはしたが、遂に果すことが出来ないうちに歿してしまつた。そこで一時は畫家の玉山に畫と共に文章をも頼まうと考へた。これは玉山が才氣ある男で文章の素養にも乏しくなかつたからであるが、此事は馬琴にも相談をしたものと見えて、文政五年五月十七日附の馬琴の書簡で、此間の消息を知ることが出来る。しかし其うちに玉山も芙蓉も亦地下の人となつたので、更に當時江戸に於て戯作者中第一の學者として名のあつた曲亭馬琴に著作を託した。馬琴も無論自己の手で之を版にしたい意はあつたらしいが、これも机上の多忙な作者で、幾年経つても其約を果さない。兎角するうちに牧之も追々老年となる。馬琴は牧之より年長だから益々老いて行くので、幾ど絶望状態に陥つたので

ある。ところへ偶々京山から、この雪の話は曾て亡兄京傳へ御依頼になつた縁故もあるから、一つ私にその材料を遣はされたい。自分の考では繪草紙様の物にして、越後の雪の驚くべき面白い話を世に紹介して見たいといふ事を牧之の許まで云うて來た。京山の意では、牧之からは唯だ材料を得て本は自分の著作にして世に出したい考であつたらしい。然るに當時は馬琴と牧之との間にまだ手が切れて居なかつたので、どうも似た様なものを出させるといふことは馬琴に對しての遠慮もあつて、牧之は京山の此申込を一應は斷つたのであるが、さりとて馬琴に囑して置いても何時出来る事か、亡羊の歎に堪へぬわけで、寧ろ之と手を切つて京山をして代らしめるが捷徑だと考へたので、斷然馬琴と絶縁して京山に之を託することに決した。

三 上梓までに三十年

抑々京山が最初牧之に草雙紙くさふうしとしての著作を申込んだのは文政の頃で、いよく馬琴とは手が切れて京山自身の著作に移つたのは天保に入つてからの事であつた。そして天保七年、越えて八年に至つて漸く前篇が出來た。勿論全部京山の著作に成つたのではあるが、それを京山の

自著とせず牧之の著作で京山は唯だ代筆したに過ぎぬ事にして世に公けにされた。詳しく云へば序文から中に收められた詩、歌、俳句の類に至るまで大抵京山の代筆したもので、名義丈けを牧之の名にして出版したに止まつて居る。こんな譯で牧之積年の宿志は京山によつて始めて達することが出來た。今は正確に調べても居らぬが、なんでも牧之がこの志を起し、そして宿志を達する迄には、少なくとも三十年の長年月を要したと聞いてゐる。京傳——馬琴——京山を経て、兎も尙前篇の脱稿出版されたのが牧之六十七歳の時であるから、如何にも永い歳月を費したもので、一の著述をするにしても當時はなか／＼容易でなかつた消息が、これによつても察せらるゝ。

牧之はこれが爲めに幾度も／＼同じ圖と同じ文章とを書き送つた。最初京傳に頼む時に送つた草稿は、火災で焼いてしまつた（尤も之はズット後に至つて火災から免かれたのを發見したが、此時は焼亡したと信じられてゐたのである）といふので、其後馬琴に依頼する時には、再び同じ草稿を書いた。此草稿は何故か馬琴は事に託して返却しなかつたといふ。牧之は斯うして何度も草稿を書き直す勞を取つた上に、尙ほそれが上梓さるゝ迄の間に起つた種々苦心の跡

については追々と叙述する積りであるが、兎も角も「北越雪譜」の出版は全く大成功を収めたのであつた。此成功は筆者京山の努力によることは無論であるが、一には當時雪譜のまだ出版されない前から、早く評判されて新刊物の番附こぎぎに小結の地位を占めたといふやうな事にも因つた。如何に前景氣がよかつたかは此一事でも知ることが出来る。これは勿論京山が如才なく種々なる廣告法を行つた結果で、其一端を云へば「北越雪譜」の著者としての牧之の名を豫め出版界へ弘めさせる意味に於て、或は自分のいろくゝの出版物に京山の代筆で牧之の名を豫め掲げて見たり、或は牧之の詩歌を載せて見たり、美人の錦繪にまで牧之の名で狂歌を掲げるといふ如く、鈴木牧之と「北越雪譜」、この二つの名を弘めることに甚だ努めたのであつた。

京山は出版界の情僞に深く通じてゐた。随つて讀者の心理作用なるものを十分に會得し、人心に投ずるやうに巧みに趣向を考へたものである。其結果は「北越雪譜」は非常に廣く世に行はれた。其結果は單に越後の雪ばかりでなく、それに附帶した越後の風俗習慣を世の中に始めて此書が傳へたのである。凡そ越後文人の文藝的著書で古來全國にひろがつた點に於て、此「北越雪譜」に匹敵するものはなからう。越後の物で全國に評判されたものは、越後の「七不

思議」などではなくて、實際此書を推すべきである。雪は全國中何れの地方にも多少は降るが、而かも越後魚沼深山の堆雪、殆ど山岳の如きを見るに至つては、七不思議以上に之を奇とせねばならぬ。果して「北越雪譜」は一種の奇書として、奥羽の端から西國の果までも盛んに賣れた。江戸に於ても幾百軒の貸本屋全部が、此書幾部かを備へ置くにあらざれば營業の出来なかつた程であつた。これは全く其話に大なる趣味があつたからである。雪譜の爲めに幾ど一生を捧げた牧之の苦心も、斯くして酬いられたと云うてもよからう。それに當時江戸の出版界では、前篇を出して見て餘程の好評を博するのでなければ後篇は出し得ないことになつてゐた。それが「北越雪譜」は前篇天地人を出して、間もなく後篇春夏秋冬の四冊を出版したに徴しても、いかに此書が出版界に持て囃され讀書界に歓迎されたかの一端を知ることが出来よう。

四 越後國雪物語

以上は「北越雪譜」が出版さるゝに至つた迄の續末を便宜上先づザツト録したに過ぎない。云ひ換へれば以下記述せんとする其序説で、倍これからは京山が牧之に與へた書簡を中心に書

かうと思ふが、何にしても十八行野紙で三百枚からもあり、年に積れば十年以上にも亘つてゐる、それを多く引いて居る餘地もないので、主として「北越雪譜」著作に關する肝要の部分、或は牧之と京山との交情に關する部分、其他多少興味ある部分などを聊か引用するに止める。それも考證家の如くに、種々解説を附したり他の書物などから取り來つて委しく説明すること避ける。而かも自分がそれを語るよりも事實上の雪譜著者たる京山をして自ら語らしめる方が却つて興味があると思ふので、その書簡の要所々々を引いて書くことにする。又京山の書簡は極めて解し易くは書いてあるが、併し今日の時文とは甚だ異つた字面などもあるから、さういふ點には多少の説明を加へよう。或は稀に雪譜と無關係の事も交るであらうが、それは書簡の順序等に依る結果で、それらには又別種の趣味があらうと考へる。

前にも略叙した如く、京山は雪の話を雙紙體に八冊許りのものとなし、牧之の著作として出版して見たいといふ氣が起つて、其意味の手紙を牧之に與へた事がある。それは文政十二年の事で、左の如く云うてゐる。

昨夜枕上にてふと心つき申候間申上候、先年貴國雪中の事を述作致し可申様亡兄へ被仰、

雪中の具ども雛形など迄細に被遺、是に小冊添被成候を年來所藏致候處、此度池魚に奪はれ残念至極に御座候、さておもへらく、北越雪談と致し繪入讀み本五冊として雪の故事古歌などを加へ出版いたさんと存付候は亡兄の趣向にも候へ共、讀本にて手重に相成、雜費も餘程に、作もむつかしく候故、ついく延引致候事に候、當時草双子のなり行きを考ふるによき時節と存候間、北越雪談を

越後國雪物語

越後鹽澤秋月庵牧之作
東京山東庵京山校合

全八冊

歌川國貞畫

右の通り草双子にいたし出版仕候は、うれ可申かと存候、御冬ごもりの内著述、御旅費等一切相掛け申間敷候

此書簡によつて見ると、京傳の頼まれた時は、京傳は「北越雪談」と名づけ、繪入りの讀み本とする積りであつたと見える。即ち讀み本五冊として出版する趣向であつたことが分る。雪の故事古歌、いろ／＼の考證を附する遣り口で、一種の隨筆の如き恰好にせんとしたのが京傳の考案であつたのである。

五 馬琴への義理立て

京山の考へでは、どうも讀み本では大分重くるしいものになるし、此時分は草双子流行の時代でもあつて、大抵のものは双子にさへすればよく賣れるといふ所からして、之を極めて解し易く婦女子迄も讀み得るものにしてはといふ趣向で、「越後國雪物語」といふ平易な名を冠する考へであつたらしい。尙ほこゝにはそれを引かないが、此雪物語を作るに就て、斯くくゝの材料があるといふ事が詳しく書かれてある。それは越後の大雪について何人も興味を感じ且つ人の意外に思ふやうなことを列舉して、こんな様な材料が入用であるとして恰も牧之に教へるが如く惻切にこれを書き列ね、一番終りの大團圓については、例のめでたしめでたしで了る趣向で、その所へは牧之翁の「寄雪祝」の歌でも入れたい、さうして畫は松竹梅を載せた島臺の上に雪の降りかゝつて居る所をかいてはどうかといふので、此書簡中には京山自ら島臺雪の圖などを書いて居る。しかし京山の此書簡に對しては、牧之は斷りをいうたものと見える。その次第は、兎も角も既に馬琴に託してあるのに、本の體裁も趣向も多少變るにしても、似寄りの

ものを他に囁くのはどうであらうかと、（りち）律義一遍の牧之であるから、折角の京山の思ひ立ちではあつたが、一應それを断つた。それに對して京山は又左の如く云うて居る。

北越雪譜の事、馬琴、玉山兩翁に存立（存立立者）も未だ上梓に及ばず、依て私より申上候雪の草紙も御著作被成がたき由御尤も千萬奉存候、ふとうかみし儘申入候、御一笑被下度候
玉山の雪の消えたる跡なれば養笠のかくもいらぬものとや

いかに雪の物語なればとて、うづめおくもおしきものに御座候、春に相成申候はどうか
御相談致し方もあるべくや

櫻木に早く上せて見たきもの雪とみやまの物がたりをば

この書簡によると、牧之の馬琴に對する義理立ても尤もであるが、併し畫をかく約束の玉山は既に歿し、馬琴も引受けながら埋没に附して其約を果さぬ、それを其儘にして置くは惜しいから活かしては如何というて居るので、歌の意味はこゝに云ふ迄もないが、玉山とは雪に因んでいたので、養笠は馬琴の號であつて、それも亦雪に引懸けて詠じたのである。春になつたら出版したいといふ所から櫻木の文字を使つてゐるが、櫻木とはこれ亦板木は櫻で作るので出版

を意味してゐる。更に玉山については、京山の書狀中にも斯う云うて居る。

玉山存在の節太閤記に付この雪の圖可相違御示し被成候由、おもしろきはなしに御座候由、玉山も畫に於ては東都にても雷鳴致し候、亡兄へ度々文通もいたし候、書も見事にて才子と見へ申候

玉山と牧之との間に交りのあつたことは前にも書いたが、此の書簡にある太閤記の畫をかいた時、牧之が雪の圖について、玉山に注意した事などは餘り世の中に知られて居らぬ事實である。又玉山は世間に多い尋常浮世繪師ではなくして書に就ても造詣の深いものがあつた事も、此書簡で始めて知る事が出来る。

六 馬琴との絶縁

其翌年には、新年早々京山から牧之に一書を寄せて切に「北越雪譜」の出版を懇懇して居る。其中に曰く、

越後雪物語の事さてく、殘念に奉存候、つらくおもふに、右の趣向の元祖と申すは亡兄

が起立にて御座候間、馬琴にかまはず先年被下候貴君の草稿を種といたし合巻に作り候趣序文へしるし著述いたし候はゞ、馬琴がいかなとも申がたくあらんと存候、いかなとなれば右雪の趣向は京傳馬琴に先だつ事十年程と存候、先生の思召如何に御座候哉御窺ひ御指圖次第に可仕候

又同じ書簡に重ねて曰く、

前に申上候如く、雪の合巻如何に御座候哉、此事先生は御存なく出版の上京山が北越の雪を新作に致候、是は先年京傳へ掛合いさ、かの草稿つかはし申候、是を京山が種にいたし作意いたし候事と存候とかなんとか申被遣候はゞ可然哉、私先生へ御あいさつなく作意候ても私へ罪を御せめ被成候事にもある間敷、馬琴より馬のしりをよこし候事もある間敷や、おぼしめしを伺ひ申候、御へだてなく御申越被下度候

即ち京山は百尺竿頭一步を進めて、全體此雪の問題は自分の兄が思ひ立つたから生れ出たものである、此點からいへば自分の方が本家本元であるから、自分があなたに御相談なしに亡兄の遣り残しの仕事だと言ひ立て、出版したからとて、あなたから御叱りを受くべき筈の物でもあ

るまいし、馬琴からあなたに掛合があつても、それは俺の知らぬ事だ、俺の方から京傳へ頼んだ當時遣つて置いた材料が残つてあつたのを種に、勝手に著作したのであるとあなたから御挨拶になつたら、馬琴から苦情の出る餘地もなからうと、兎も角熱心に慇懃を試みて居る。

此幾回かの慇懃に對しては、さすがの牧之も心を動かさずには居られなかつた。それも實は道理あることで、京山の書簡によつて見ても、牧之が京傳に頼んでからも既に十年も経過して居る。馬琴に頼んでからは幾年になるか分らぬが、これ亦數年か、つて更に一枚の原稿さへ出來ぬといふわけで、牧之もだん／＼老境に入つて來る、自然京山の熱心な勧めに對して應じたくもなつて來る。併しながら馬琴がな／＼面倒な人物であることは牧之もよく／＼承知して居るので、如何にして之と手を切るべきかと頗る苦心したらしいが、結局手切れの談判と意を決して、そしてつひに絶縁を申込んだものと見え、その意味の事が牧之から京山に通ぜられて居る。

七 畫工其他に就ての配慮

京山が牧之宛の書狀中から一二の事を抄録すれば、

馬琴は自負の人であつて、雪の隨筆と云ふが如き類のものは、當世筆を取り得るもの乃公一人で、他人の能く成し逸げ得べき事ではないと、實は高を括つて今日迄放却して延引を重ねて來たものである。然るに先生が手を切つていよく私に御任せになつたと馬琴が聞いたならば、首を傾けてどんな事を云ひ出すかわからない。其邊の事は能くく吞込んで居らねばならぬ。又馬琴の所へはあなたの方から色々の材料が行つて居る。先づ其材料を取り戻す事が肝腎ではあるが、下手にひねくれられると材料も戻さぬと云ひ出すかも知れない。

こんな事を注意してゐる。果して京山の氣遣つた如くに、馬琴は結局京山に編纂を任せることに同意はしたが、牧之から送つた材料は戻さなかつた。其理由として、折角あなたの筆に成つた好記念物である、自分が著作をなし得なかつたのは誠に濟まなかつたが、しかし永い間種々考案を廻らして來て居る、就ては材料は私へ下さい、自分は表装をして家に遺したいといふわけ、到頭圖も草稿も戻さずじまひになつた。此の事に就ては鈴木家に残つてゐる馬琴の手束

集、それは凡そ二百枚近くのもので大きな冊子に作られてあるが、其巻頭に牧之がそれに就ての序文を書いて居る、それを讀むと、何故に馬琴は材料を戻さなかつたのであらう、自分は斯かるもの、他の手に残る事を耻とする、よつて種々馬琴に談じては見たが、遂に戻さなかつたと云うて何となく不快の筆致が見えてゐる。

京山は前の如くに書き終つて後、同じ書簡中に早くも著述する時の種々なる考案に言ひ及ぼしてゐる。

私存寄にては讀本の形にいたし、雪の圖なればうすゞみの彩色を入れたる所もありたり、(彩色本國禁なれ共、薄墨は制外なり)又人物を見せたる所、細畫の所、色々取りまぜ目を變らせたし、北齋の筆なれば上々、次には英泉なるべし、國貞などの筆の物でなし、唐畫家に書かせては俗に落ち不申、うりものにはあしく候、上梓のうり物は文晁でもあしく候、先年亡兄へ被遺候同草稿の時よりは乍憚御畫も御進み、雪の事は段々詳しくならせられ候事と存候儘、此節又々草稿被成候は、目を驚かし申す事と存候、貴君を發起として亡兄や、玉山、曲亭など上梓の意ある事は書林などは更に不存處、草稿を見せ候は、刻する心

に相成可申かと存候、先づ下ごしらへの御草稿、おぼしめし次第早々御取りかゝり可然候、雪を鏝にて引わり申候處の圖などは大きく見せたし、めづらしき事に候、市中の有様と山中の有様と、雪中鳥を取る事、漁獵山獵の圖も面白かるべし、かくべつ御念入りたる圖にも及ばず、眞畫にては御手もかゝるべくと存候

さすがに京山は繪入物の著作にかけては經驗がある故、誰に畫をか、せようかと云ふ事は此書簡によつても早く既に工夫する所があつて、畫家の選び方など考へたものである。如何にも文晁でもなく、南畫の畑でもない。さうかと云つて國貞くにただのやうな、人物を畫くには妙手であつても風景畫に拙なるものでも駄目である。北齋ならば上乘だと云つてゐるが、如何にも、尤もの月日である。又其後に京山から左の如き書簡を牧之に與へてゐる。

雪話の御草稿昨夜中八ツ頃迄に荒々拜見仕候、圖などは一しほ玉手を勞させ給ひたる事おしはかり申候、御文章の内貴國の方言にて御しるし被成候處々に江戸人にはさとり難き事も見へ申候、熟覽の上推量に落ちざる所は跡より御尋ね可申候、すべて著述は机上に筆を採りて幾百萬人に示し候ものゆる獨り合點にてはこまやかにさとしがたく、よんでわから

ぬとおもしろからぬ始り也

○雪中の圖どもさてく目を驚かし申候、圖の中に人家のかたわらに水瓶ともおぼしきもの、大なるを、こもにて包みあるが家毎に見え申候、是は雪中に水を貯え置き候にや、大家にては三つも四つも貯へたる様也、是は人が多く候故の事に御座候や如何に哉

○御草稿拜見してつらく思ふに、越後の鈴木より國の名物として魚類、青物、品々山東へおくり、是を料理しては江戸の人及び京浪花の人にも口にあひ候様に振舞候へ共、おくられたる魚類青物を見て獻立をして、なます、ひら、しる、其外種々に料理し、膳立までして、いざ食し給へと云ふ様なものにて、折角めづらしき雪話といふ趣味をふあんばいにしたたべさせ候ては、一碗を喫して今一杯と申す間敷、此處に於て筆をとるに心あるべき事と存候間よく熱覽いたし、北越の雪をよく腹へしみこませて筆をとり可申候

追々と京山が氣乗りがして來て、料理にたとへる所などは作者の極意を云うてゐるものと見べく、天水桶の凍るのを防ぐ爲めに菰にて巻かれてあるのを圖に見て、京山が飲料水と解釋したなどは江戸人として無理からぬ事ではあるが、越後人から見れば聊か滑稽の感がないでもな

い。

八 材料發見の喜び

前にも少し書いて置いたが牧之が最初京傳に著作を頼んだ時、草稿は勿論、雪に關する圖、其他雪國の種々なる用具、例へば燗かき、かんじき、雪下駄ゆきぞうりの類をわざと小さな模型に作つて多く参考に京傳の許へ送つてあつたものである。京山がいよゝゝ著作するについて、これ等のものは至極大切のものであるが、京山の家は不幸にしてこんな交渉を重ねつゝある間に火災に罹り、家財の幾んど凡べてを舉げて失つたので、其後土藏を建て直すことなどの混雜があつて、京傳が牧之から預つてゐた材料を一時見失つてしまつた。此一事は京山の非常に悲んだ所であつたが、其焼失したと信じてゐた品が、後に焼けずにあつたのを發見した時の京山の喜びは名狀す可からざるもので、其狂喜の情を牧之に報じた書簡には、細かな目錄まで書き添へて左の如くしるされて居る。

拙家此節土藏建替申候に付、土藏に納め置候雜具書籍の筈ども見世二階へ移し申候に付、

火器用心の品は親類共土藏へあづけ申候、依之亡兄手澤の抄録など取調べ申候内に小風呂敷に包、出火持退と申札紙附のものあり、ひらき見候へば前年貴君より御認め被下し二季雪話と申す横本の繪抄并に越後國繪圖一枚、澁紙小宮の内に雪車、すかり、かじきの類の雛形あり、去年大火の節持出したるつゞら二つ焼亡いたし候故、右品も其内に焼け失ひ候事と残念がりしに、今此風呂敷包を得て泥中に玉を拾ひたる心地して、黄泉の亡兄を思ひ出し、萬歳の貴老雪に御深切なるをかんしん仕候て三十年の昔、一日の如くに存候、云々」

右申上候先年の圖を見出し候故、先づは腹にのみ込み申候、しかのみならず九月末に奉公人召抱申候、此者は越後國魚沼郡千駄ヶ谷藤澤村百姓市二郎二男吉藏、當年二十才に相成申候、老實の者にて此吉藏に貴君の雪の圖を見せ、これはかうであるか、これはかうかと受け給はり、前年の雛形を見せ、雪車の使ひ方、雪中の働き、其外雪のはなしき、申すと、一文不通の者故はなしも前後錯雜いたし、國の話をする時は一しほ國ことばに相成り、き、わけ難き事多く、はからず一笑を催し申候、され共目前にはなしを其人に聞き候故發問の事も多く御座候

曲亭よりも音信ありて、雪話の事私へも曲亭よりたのみたしとの事、上首尾安心仕候

これによつて見ると、幸にして失せたと思つたものが發見されたので如何に京山が喜んだかわかる。何にしても越後の事情を更に知らぬ作者が、書信の往復のみで材料を得るのだから、如何に模型を手許に送つて貰つたにしても、それがどう用ゐられるのか、江戸の人などが想像の及ぶ所ではない。然るにそれが雪の深い所のものを抱へ入れて、それに取敢へず雪の話聞いた一齣の如きは、讀んで頗る興味を感じる話である。

九 馬琴と京山の疎隔

前項の書狀の末段には馬琴もいよく承諾して、京山へも其旨を申越して來たといふので、京山は案ずる程でもなく甚だ好結果であつたと喜んで居るが、こゝに聊か馬琴と京山との間柄に就て書く必要がある。全體誰も知る如く馬琴は文壇に雷名を博した人であるが、實は京山の亡兄京傳を師として戯作の修業をしたものである。馬琴は京山よりも年長であるから、云は、先輩の地位ではあるが、併し自分の師たる京山に對しては、馬琴と雖もそこには多少義理

もなければならぬ筈である。年始、中元などの季節には互に往來もしなければならぬわけであるのに、此二人は殆んど吳越も管ならぬ程に疎遠で、馬琴は曾て一度も師家なる京山を訪ねたこともなければ、京山も亦馬琴の消息は牧之の書簡によつて始めて知る位であつた。これは馬琴の傲岸なる氣質が因をなしてゐるに外ならぬのであるが、是非の判断は他に譲つて兎も角二人は甚だ相和さなかつた。之に對して律義なる牧之は頗る面白からず思ひ、書簡のついでには京山に向つて「忍」の一字を説いてゐた。話がつい岐路に入つた形であるが、問題の雪譜がよいよ馬琴の手から離れて京山に移つたについては、牧之は益々此兩者間の疎隔を解きたいと考へて、どうか是非馬琴と往來して貰ひたいと京山に向つて切に勧めた。牧之の書簡に答へた京山は、此事について左の如く云うてゐる。

馬琴へしたしみを結び私寵越、翁が起居をも尋ね候様にと御心ぞへ被下ありがたく、吳越の如く更に音信も聞き不申候故に眼病の由も尊翁御書中にて始めて存じ申候、著作堂と申す人、腰はぬけるとも右の手さへ自在ならば机上に黄金を耕し可申候へ共、眼病とはさてさて氣の毒千萬也、何れ尊意に任せ近日わざ／＼御尋ね可申候

馬琴の眼病といふことは江戸に居る著作仲間では唯一人知らぬものはない位であるのに、それすら京山は知らずに居て、牧之の書信で始めて知つたといふ事から考へても、その疎遠の程度がわかる。この一齣は天保六年とも思はる、正月二十四日附の書簡に詳しく書かれてある。

一〇 京水と雪譜

更に又「北越雪譜」の問題に戻るが、天保六年九月九日の書簡には左の如く認めてある。

私ねがひには雪志初篇來春三月迄に上梓發兌して評判もよろしく、書肆後篇もと申候節にいたりて、五月京水を具して尊堂へ草鞋をとき、後篇の御相談いたし、京水眞景を寫し候事もあるべし、かくあらば上々の首尾也、表題の事學友達へも相談いたし候處、話の字よりは志の字の方可ならんと皆申候ゆゑ十日の視る所に従ふ

.....著

北越雪志 三卷

.....校

五 北越雪譜の出版さるゝまで

二九五

此書は……………書肆文溪堂梓

右日向半紙一枚半にすり申候もの江戸中大屋へくばり申候、是を書林のことばにびらと申候、賣り出しまへにくばる也、右は十枚ばかりやがてさし上可申候

これによると、兎も角相當に筆もはかどつて、先づ凡そ其時分の習慣として「ちらし」を撒く迄に進んだのである。且つ又若しも成功すれば、息子で畫のかける京水を伴ひ、後篇出版の相談に越後行の段取迄してゐることが窺はれる。

尙ほ此京水について少しく書いて置くべきことは、京水は此作者の片腕ともなるべき大切の働きをしたもので、畫が相當に描かれた爲めに、雪譜著作前の事ではあるが、京山は京水を伴うて熱海に遊び、數日そこに入浴した際も京水に熱海の風景を描かせて、それに京山の文章を添へ、「熱海圖景」と題して世に出したこともある。更にこゝに附記すべきは「北越雪譜」の挿畫の大部分は京水の手になつたことである。

一一 越後下りの前觸れ

京山は又同一書簡の中に、いよ／＼越後へ下つて牧之を訪ねる時の事を豫め左の如く書いて居る。

さきの長き事を今申すも老の癖なり、わたくし命ありて、家内も無事にて、來年尊堂へ京水同道參上の節、相願ひ候約言左の如し

一、滯留の節被下候御膳、御家内末席につらなり、御一同様と同じ惣菜いたゞき度事、別段の御馳走は堅く御斷り申上候、却つてうまくたべ不申候事

一、夜具絹類御無用、是等堅く御ことはり申上候、私共平日本綿夜具相用る申候事、並に夜具の上げおろし自身に仕度事

一、下足のあつかひ等まですべて御家來の御世話に相成候ては却つて迷惑いたし候間、自身にいたし度候事

一、萬端客のあつかひは御免可被下候、御親族末席の者同様に奉希上候

右の如くに候へば心よく足をのばし逗留もいたされ候、いか様粗末に御取扱被下候とも決して御恨み不申候、旅行者別て堪忍大明神と心掛申候、御一笑く

京山の此書簡は實に委曲を盡したもので、幾んど對坐して語るが如きは筆のまはる人の常であるが、特に此書簡を掲げるのは、京山の文才を示すと共に其人格の一端を知らせたい爲である。京山は江戸に居ては當時頗る文名の高かつた人であるが、その割合に質素の生活で、酒も飲まず贅澤もせぬといふ平生の狀が、此書中からも偲ばれるといへば云ひ得る。

一一 書名漸く定まる

同じ天保六年五月の書簡中に曰く、

つらくおもふに、此度雪篇の一擧、尊翁畫を能し給ふ故、圖あり説ありて成れる也、余幸にこれに與りてその全をなせり、一度梓に上りては海内に布き候て不巧にも傳ふべし、拙文の代筆に尊名を穢すと雖も、天幸を得て世に行はれたる翁が名を他國に雷同せん事、我に於て雀躍に不堪候、翁が年來の御望み一時に成就せん事、良縁の時を得たるに在り、可賀く

一昨日（五月二十日）書肆文溪堂の番頭嘉七と申者訪ひ來り、雪上の卷、筆耕之校合持參

申候、さて主人口上に、雪志之外題、相成るべき事ならば雪譜と申被成度、右は唱へもよろしく、且亦先達而中より京、大坂、名古屋本屋共へも此度雪譜と申すものほり立て、やがてうり出し候噂も申つかはしおき候、その返事に雪譜くと申越し、或は又馬琴著述の末にも此名見申候ゆゑ、他國本屋共も雪譜方請よろしく故、なるべき事ならば雪譜にいたし度、それとも先生恵召次第と申候ゆゑ、私言下之答へに譜も志も字意は遠からず、志とする所以は馬琴が題したるがいやさ故也、これは此方のまけ惜み也、馬琴が一笑は滄海の一粟也、譜とすべしくと答へ申候、此段左様に思召被下度候、さて此嘉七へ酒肴をもてなし、しばらく物語の内に、雪譜はいつ之頃よりうり出しに成るべきやと尋ね候へば、嘉七曰く色々ほり立て候物御座候故、先づ五月金と存候と申候、此の五月金とは來春にうり出して五月拂をとる事を云ふ也、これは仲間同志の通言なれ共、京山は作者故、仲間の通言を以て答へし也、來春出版大當りを願ふ、可賀く

嘉七が言ばを聞いてうれしく、即興

ほりよて積み重ねべき雪の卷消ぬ言ばをたのみこそすれ

前に掲げた書簡中にもある如く、百里から離れた遠隔の土地で互に見もせぬ人が幾んど江戸に於ては想像のつかぬ大雪の本を書く。それがともかく纏まるやうになつたといふのも、畢竟京山と牧之との間に種々微細に亘つて文書の往復があり、或は京山から質問して來た草稿を牧之が見てこれは斯うありたい、こゝは間違ひであると一々訂正したりして、種々なる面倒を繰返した其勞苦の大なるに因ること、思ふ。随つて其文書は何時も數十枚に亘つた細書である。又同じ書簡中にある如く、抑も雪譜のまとまつた所以は、主として牧之といふ人に畫才のあつたことが關係をもつてゐる。粗雑ながらも文筆の及ばぬ所を畫で寫すといふことが、詰り雪譜成功の基で、それは京山の言の如くである。又その表題については、京山は或は雪話とつけ、或は友人に相談して雪志と改めもしたりしたが、遂にそれを雪譜と名くるに至つたのである。前にも書いたやうに、馬琴は牧之から著作を託されて、遂にそれを果さなかつたが、併し雪譜の命名者で、此名を弘めるには大功があつた。最初表題を雪譜などがよからうと言ひ出したのは馬琴で、自然に其名が定まつた上に、馬琴の著はした隨筆「立同放言」の終りに、まだ筆を執らないこの雪の話を「北越雪譜」として廣告もしてある。こんな事から諸方の書肆仲間或は讀

者の間にも其名が知られてゐたので、本屋から雪譜々と迫られるに至つたのは無理もない。多分京山自身も其位の事は承知してゐたであらう。其書簡にもある如く馬琴の跡を踏まない様にといふことで、志とか話とか附けたのであるが、それが遂には馬琴の定めた名に戻つて、其名で出版された巔末は、前掲書簡の言うて居る通りである。

一三 著作料僅に五兩

又同じ書簡中に於て、再び越後へ漫遊することに就て言ひ及んでゐる。

來年五月私父子遊策之節は、油屋翁善光寺迄御案内もあらん様に御申のよし、ありがたく存じ候、蒲原七奇も新潟も遊覽いたし度候、併し文藻を挾んで漫遊する文人多くは○之爲なり、余も其同臭ありと雖も絶窮にはあらざれば、錢を見ること蠅の血を見るが如くにはあらず

五六七月の間技を賣つて囊中十金(十二)餘せば足るべし、嗚呼拙技を賣つてこれを得んこと難かるべし、茲に尊翁が庇護を希ふのみ、遠近之諸友へ御略御ひろめをねがひ上る

この書簡によつて見ても、先づ京山が頗る眞摯の性格だといふことがわかる。馬琴ならばもう少しエラさうに書くであらうと思ふ所を、敢て錢が欲しくないと言はぬが、三ヶ月も越後に滞在して結局望みはどれ丈けであるかといふに、拾兩、それを更に訂正して拾貳兩を得れば足ると云うて居る。どちらにしても餘り大なる望みとは思はれぬ。勿論此時分の金の貴いことは今の想像の及ばぬ位のものではあるが、現に六七年もかゝつて非常に勞をとつた「北越雪譜」が、どれ丈けの著作料を牧之に約束したかといふに、只僅に金五兩であつた。而も其中には息子の京水が幾ど七八分通り畫筆を揮つた其畫料をも包含して居ることを考へると、いよく十二金といふものは其當時として少ない金でもなからうが、併し先づ大體に於て小なる希望というてよろしい。

一四 京山の馬琴訪問

京山が牧之に與へた同じ書狀の中に、馬琴に關する一齣がある。

馬琴が臺所蕭然たらんとて御憐察御厚情也、平日自重いたさぬ謙徳の人ならば書畫會でも

す、め、幸によりては四五十金は得可申候へ共、老鷹喬木に款立(原字不明)して人を燕雀にする氣質故、これらの事す、めもしがたく、又平日人に交はらぬ人ゆゑ、書畫會の五十金は千門萬戸へ腰をかゞめねばならず、今更左様にもなるまじ、嗚呼悲い哉

今日(菊月二十五日)菅神へ參詣之歸るさ馬琴を訪ひ候處、もはや明き家也、飯田町へつばみ候事と存候、塀より見やる庭前の紅葉ばかりが時知り顔にけれなるを示したるを見て悲涙一滴せり

あるじなき明家の庭に錦して紅葉(此間文)照りまさりけり

明き家のかどに空荷のつなき馬琴は隣りにかきならしけり

住みすてしあるじ尋ねて此頃に逢ひ瀧澤が宿札のあと

など思ひつゞけ宿へ歸り申候

京山は牧之から頻りに馬琴を訪ねるやうに勧められ、始めて訪問して見ると、空家になつて居たと知らせて來た書簡である。其時分馬琴は湯島に居たので、京山は湯島天神へ參詣(ついで)の序(ついで)に訪づれたものと見える。併し空家と見たのは京山の間違で、門札がとつてあつて、戸がしまつて

ゐた爲め、始めて訪問した京山は馬琴が家計不如意の爲め遣り切れなくなつて轉宅したものと早呑込をしたものであらうが、實は後に掲げる書簡にもある如く、馬琴は矢張りまだそこに住んでゐたのであつた。

然るに京山が馬琴を訪づれた日に宅へ歸つて見ると、馬琴から牧之へ宛てた書狀が到着してゐた。此時分は京山の方が馬琴よりも「北越雪譜」の關係で牧之と書信の往復を重ねてゐたので、馬琴から牧之へ届ける書狀は京山の所へ持つて來て、更にそれを幸便に託して送つたもので、その事は京山の書簡中にも見えてゐる。京山は此書狀に就てフト考へたのは、書狀は牧之宛であるが、之を開封したならば馬琴の消息が知れようと感じたのである。ところで茲に書くべきことは、牧之は豫て京山に對して馬琴からの書狀は開封苦しからずと云ふことを許してあつたものらしい。その事も亦京山の書狀中にチラホラ見えてゐる。其わけは、察するに馬琴の書狀が越後へ届いて、それを牧之が見て、そして其中に認められてある事を更に江戸へ報じて來るといふ事になると、其間大變な日子を要し、時に甚だ遅れることもあるので、便宜上先づ開封してよろしいといふことにしたのであらう。そこで京山は開封して讀んだのであるが、當

時京山から牧之に宛てた書中には左の如く書いてある。

翁への返書とて懷中より出し候ゆゑに馬翁が身の上のことも此書にあらんと存じ、且つは兼々御差圖にまかせ内見して御届け申候、是より馬琴の書簡を見んとて先づ筆を此處にとどむ

一五 一覽火中記

さて京山が馬琴より牧之宛の書狀を内見してみると、茲に京山には黙視されぬことが書かれてあつた。試みに其内容を云うて見ると、牧之が雪譜の著述を京山に任せ、それが漸く成功せんとする場合に臨んで、馬琴は其功の全く京山に歸せんことを妬ましく感じたかの如く、例の馬琴の筆法で、實は雪譜の板元^{ちやうじや}丁字屋には自分からも懇々頼んで置いた、その結果として丁字屋も快く引受けた、といふやうな事を書いて、非常に御爲めごかしを云うてゐる。其中に京山から言はずれば頗る虚偽の言を弄してゐる様な點が散見されるので、京山は一讀大に憤つた。そこで早速筆を執り、馬琴の言に對して辨駁書を書いた。それは「一覽火中記」と題する四五

枚のもので、さすがに痛快に駁して居つて、何人が讀んでも馬琴が僞君子であることを思はしむるに足るものである。一々此處に其長い文章を引くわけには行かぬが、全體馬琴といふ人は非常に自負心の強い人で、それが爲めに往々非難を受けた。且つ著作者などといふもの、癖として、兎角同業者間相互誹謗を敢てするが通弊で、馬琴亦此弊中の人たるを免れ得ないわけであるが、單に此時ばかりではない。それより後に至つて、馬琴の題せる雪譜といふ名を用ゐて居る事に就ても何か誇り顔に云々して、牧之に書狀を寄せて居る位で、この「一覽火中記」の一番末に、京山は例の狂歌二首を載せて馬琴を罵倒して居る。

狐のみ人をばかすと思ひしに馬の狐にまさるにくさよ

乗せ掛けてさて喜ばず馬なればひそかに人をけることもあり

これは勿論馬琴が「北越雪譜」の著述を引受け、長く牧之を悦ばせてゐて、到頭出來ずに終つた事を諷したのである。

一體馬琴の性質として、一度自分の繩張内に入つたものを人手に渡すといふ事は餘程遺憾とする方であるから、何かにつけて文句が起りはせぬかとは、豫て京山も恐れ且つ期して居たの

であつたが、馬琴の書状を見て、そろ／＼起つて来たワイと感じたのである。それよりズット後の書簡中にも京山は他日の事を心配して云々してゐる所がある。それは雪譜前篇を世に出して、それが若し成功したとなると、馬琴は或は書肆の方へ手を廻して、書肆の方から牧之に向つて後篇を馬琴に頼むやうに云はせて、後篇著作の野心を起さぬとも限らぬ。どうか萬一さういふ事が起つても、もう後篇の草稿は略々出来上つてゐるし、尙ほ其細目、圖などについては相談の爲めに京山が越後へ下ることに迄なつてゐるといふ事で御断りに相成りたいと、豫め牧之に注意を與へてゐる。京山の此取越苦勞に對しては幸に其事なくして濟んだのであつたが、京山が斯く迄懸念したことも、馬琴の性格にそれ丈け彼れをして警戒せしむるものがあつたらである。

一六 道樂ものゝ北馬

天保六年十月廿一日附の京山の書簡にも越後に行くことについて細々と書いて居る中に一笑を催させる文章がある。

來春私遊策の節、先觸の事など御眞情被仰下ありがたく、私も間尾帳にて往來すべき心掛也、北馬尊館へ逗留中厚く御取扱のよしは北馬よりも聞き申候、人之信は萬歳不消、北馬は酒色をこのみ候人物ゆゑ、尊堂逗留中も妓樓へ登り候事しばしなる由も北馬かたり申候、私は二十年以來もとめて妓樓へ登る事をせず、又たましく富人に誘はれ妓席に連なり候事あれど閨房に入ることをせず、賢人顔して色を好まざるにあらず、頗る名を賣り候故京山が如何なることを云ひしやなどと其妓に尋ねる人もあるべし、閨中の語は何れ痴情なるものゆゑ一言に名を穢すもいや也、又一度限りにて再び其妓をむかへざれば遊里の情緒を知らぬ奴と言はれても口惜く、寧ろ妓に近よらざるがまし也と、九年面壁之悟りをひらき候、江都の遊廓ですら如斯、況や村妓驛娼に於てをや、たとへ新瀉之淫廓にたてこもる八百八後家（此間文）めへつた孔明の八陣を布き八方より取りかこみ、ふんどしの旗をひるがへし風の雨を降らすとも、京山文筆の矛先を以て突破り、先生さんわしにも扇を一本かいてくんなさろと降参させん事、余が胸中に在り、此義に於ては御安心可被下候

この書簡は、最早追々越後へ旅行の期が迫るについて、更に旅行出先きの事迄書き立てたもの

である。この先觸れ、或は問屋帳といふ事は、今人には一寸分り兼ねるであらうが、苟くも徳川家の家來ひらひ或は士籍に在るもの、旅行に當つての特權ともいふべきもので、これが爲めには黙もくなからぬ便利を得る。先觸れを發して宿泊所を定め、人足を徵發するなどのことをいうたのである。又此書簡によつて牧之が北馬に交りのあつたことも知られるが、北馬は北齋の門人で、浮世繪を書いて相當に名聲を得たものである。しかし永い間放埒はなはをしてゐたらしいが、京山は北馬とは選を異にし、放埒はせぬというて獨自の地歩を占めてゐることが文字の間に歴々としてゐる。斯くていよく、天保七年の夏には京山は牧之を訪ふ事になつたので、約の如く、それは是非雪譜三冊を版にして、それを土産に持つて行かねばならぬといふので、其頃の書簡には頻りに版の督促をしてゐる事が書いてある。若し間に合はねば校正刷でも取揃へて持參しよううと、氣を揉んでゐることも書面の上に見えてゐる。

一七 父子相携へて越後へ

京山書簡集の最後に、天保七年五月發の書狀がある。これはいよく、江戸發足に近づいた場

合の書狀で、その中には左の如く書かれてある。

此度旅行は御本丸御數寄屋組頭野村休成内岩瀬理一郎と申先觸れにて旅行仕候（右は私茶道の師也）

江戸發足より七泊りにて御地へ着の心得也

先觸れは鹽澤留りに可致候（發足前日にも先觸れ出し可申と存候）

此書簡は即ち先觸れ、問屋帳などを説明してゐる。元來京山は茶人であつて、自分の家にも釜をかけて幾何かの弟子をとつて居た位で、この書簡に幕府の茶の役人の門人であると書いてあるのは其故である。岩瀬理一郎といふのは京山自身のこと、京山は又百樹ももきとも稱した。さて此の茶の御役人は石州流の茶人であるから、京山も亦石州流であつたことは云ふ迄もない。兎に角四十年の交りで、交通は頻々とやつてゐたが、まだ一度も顔を見たこともない其人と、手把つて互に談ずるのも近きにある事を喜んでゐる様子が此書簡には躍如としてゐる。

斯うして京山は遂に約を履んで天保七年夏、子息京水を伴うてはる／＼鹽澤迄下つて、草鞋を鈴木家に解いたのであつた。そして漸く出來た「北越雪譜」——恐らくこれはまだ板に彫刻

した丈の校正刷を、假綴にしたものであらうが——を、待ちこがれてゐた牧之に土産として贈つたこと、思はれるし、之を受けた牧之の喜びは實に喩へるに物がな位であつたと察せらる。何にしても牧之が雪譜著作の考を起して京傳に囑して以來、三十年の星霜を経てヤツトの事で出来たのであるから、その喜悅はまつたく想察するに餘りある。

さて京山といふ男も、兄京傳の關係から懿徳をはなれて全然好意的に此著述をなし、且つ詩歌俳句までも悉く代作をしてあるのに、何處までも牧之の著として世に出したことも矢張り好意の一つである。尙ほ其人の著作であるから、どこ迄も其人の意に副はねばならぬといふ所から、細大となく牧之に相談した。従つてその往復書簡は實に澤山のものである。何れにしても著作には經驗のない田舎風流人の牧之の事であるから、種々なる注文難題が書簡の折々に云はれてあるのを、京山は又少しもそれをうるさからずに、云うて來た事柄について、改むべきは直ちに改め、又牧之の云ふ事が誤つて居る事は懇切に説明して、毫末も倨傲の氣を示さず、牧之をして快く納得せしめ、そして此一篇の「北越雪譜」が出来上つた。斯う考へると多年に亘る京山の心勞を察すべきで、若し京山が勝手に書く自著であつたら、恐らく五年もかゝるもの

を半年位でサツサト書き上げてしまつたであらう。それをば幾んど雪譜の原稿にも近い程の紙数の書簡を積んで、しばく往復を重ねたといふことは、他の文人達のなし能はざる所を爲したといはねばならぬ。且つ越後の地を曾て踏んだこともなく、越後人でも雪の薄い地方のものは想像も及ばぬ大雪の有様を餘り間違もなく、さながら越人の寫實的に書いたものであるかの如くに現はし得たのは、畢竟細目に亘つて非常に煩はしい往復を重ねた結果で、雪譜が江戸の人の手に成つたにも拘はらず、それが全く土地の人牧之の筆に成つた如く見えるといふのは、京山勉強の力によるといふべきである。

一八 牧之の中風再發

一「北越雪譜」に收めてある幾多の畫は、最初の計畫では國貞くにさだといふ浮世繪師に書かせる筈であつたが、それが擄取らぬ爲め僅に印しよしばかりに此の人の描いたものが載せられてある。その他の大部分は京山の息子京水で、親父の傍らに在つてその指圖のまに筆を執るから、畫と草稿とつくり合つてゐる。一軒の家に文章を書くものと畫をかくものが揃つて居るなどは希有

の事で、雪譜成功の一原因は確に此處にもあると云ひ得るのである。

京山の書簡はすべて野紙に書かれてゐて、之を集めれば直ちに冊子になるやうな體裁になつて居るから、百四五十枚宛を綴ちて大きな厚い二冊の本に仕立て、ある。而して其巻端に牧之が「兒孫に示す」と題書して、京山との交際、雪譜編纂の始末を叙して居る。但しこれは兼て牧之が中風の氣があつたところ、恰も京山が越後の鹽澤へ訪ねて行つた時に又復それが再發して、折角珍客の來たのを家に留め置き、自分は三週間ばかりどこかの湯治場へ出かけ、それから中風がだん／＼重くなつて餘程不自由になつた。その後書簡を冊子に綴り、まはらぬ筆を強ひて書いたものであるが、その文を讀んで見ても大部分の意味はわかる。一寸文章の通じない所もあるが、なるべく意味を取違へぬやうに自分で補つて、聊か筆も加へた上、左にそれを掲げよう。

兒孫に示す

山東庵京山は涼仙と號し通稱は岩瀬理一郎、故人京傳之舍弟にて、兄五十餘歳、急病にて物故、實子なき爲め其跡を受く、京山子、青山侯之近侍たりし時武藝を好み其修養あり、

又篆刻をも能くせり、而して山東庵一流の戯作をなして世を渡る、余此兄弟と魚雁往來すること四十年、余が一生の志願は北越雪譜を著して普く海内に流布せんとするに在り、初め雪畫と説とを京傳に寄せ、余の爲めに一書を著さん事を託し、京傳も諾し、繪は玉山、芙蓉に託し、これも諾したるに、皆前後して黄泉の客となり、志願行届かず、其後馬琴翁と交はる事深ければ之に託すること、なり、翁は越後雪譜の表題を撰び、立同放言に掲示せししながら机上の耕生活世話敷とて徒らに星霜を重ね、馬翁もはや六十の坂を四ッ越し居れば成功覺束なく、依て之を斷り、更に京山に託せし所、いとたやすく引請、剩へ余が著述名義にて聊かの謝金にて引請、開板前より江戸に評判立ち、近年の著述番附の小結びの地位を占むるに至りたるは偏に京山の取計らひによる事也、馬翁も後悔して京山を誹謗し悪口を申越したれど、余は京山に忍耐を説き、しばらく馬翁を訪はしめたり、京山も兄以來の舊交を忘れず遠路を意とせず、ことし天保七年五月廿日餘り、机上の耕を廢し子息京水を伴ひ尋ね來り、積る話に日の移るを知らず、水無月半ばかりにして自分の中風發し、三廻りの入浴を要する爲め留守之饜應を牧山に託したり、余が病は其後漸く重く、京山滯留六

十日に及び、京山善光寺を廻り歸府せり、實に今生の別れと京山の消息を病中のつれづれに
取集め、牧原にさし圖して冊を合綴し永く記念となす、兒孫みだりに之を反故となす莫れ
この自叙によつて京山と牧之との交情がわかる。即ち前に記述した事實がこゝに簡単に裏書さ
れてゐるやうなものである。

一九 京山と越後

京山の書簡なるものは、彼が鹽澤に牧之を尋ねた所までしか書かれてないので、鹽澤に於け
る京山の消息、江戸へ戻つて雪譜後篇を著すまでには四年もかゝつてゐるが、この間に牧之
とどんな往復を重ねたものか、その點が甚だ明確でない。京山の書簡集は今一冊あるといふか
ら、それを見ればおのづから判断もつくであらうが、富目する機會を得ぬので想像して見るほ
かはないが、只雪譜後篇を讀むと、京山が越後に於て見聞したことがチラホラ載せられてある
ので、それによつて消息の一端は窺はれる。第一、京山は越後を如何に見たかといふに、實は
京山は息子を連れて越後へ行つたが、越後でも山の多い殊に深山地の魚沼地方うまなまを見た丈で、新

湯にも寺泊にも行く事を期して居たに拘はらず、折ふし主人役の牧之が中風に罹つて湯治に出かけるといふ騒ぎで、萬事心の儘に行かなかつた事情もあつて、幾ど何處へも行かずに江戸へ立歸つたと見える。雪譜後篇に京山の録して居るのを見ると、鹽澤滞在四十日、鹽澤をはなれて小千谷へ遊んだのが十數日、小千谷には岩居といふ人が居て、姓はわからぬが牧之とは親戚關係にあるものらしく、京山はそれを頼つてその家に滞在し、それから江戸へ戻つた。折角百里を遠しとせずして出かけた京山は、山を見て歸つたに過ぎぬ。鹽澤は別して山地、滞在中の四十日間は殆ど一回も鮮魚といふものを箸にすることが出来なかつた。小千谷に至つて始めてそれも川魚である鮮魚を口にしたのである。

併し京山の越後へ着後は熱心に雪の問題を研究した。其中でも一番興味を感じたのは市中の家屋の構造であつたらしい。即ち雪國特有の雁木がんどを見て不思議の眼をみはつたのであつた。それから雪中歩行の用具「かんじき」の如き實物を見たのは始めてであつて、京山はそれを自ら穿き試みなどしたものであつた。牧之の家人はそれを穿いて、あの重くるしいものを自由自在に操縦するのに、京山は穿いて見ると身動きもならなかつたといふ笑話もある。

又小千谷滞在中、一人で郊外に散策を試みた事がある。さうすると物を荷うた三人の女に出逢うた。此三人の女は物を荷うては居るがよく見ると鄙ひなにはめづらしい程の美人なので、越後には美人が多いと豫て聞き及んだ如く、實際美人國であると感じ、さすがの京山も見とれて恍然となつた程であつたが、岩居の家に歸つて其の事を話すと、一同は笑つて、其女こそ此の邊の穢多の妻や娘で、誰も相手にするものはないと云はれて一笑したといふことや、又同じく小千谷滞在中、地獄谷ぢごくやで遊んだのであるが、其時岩居は氣を利かせて、土地の藝妓二三名を杯盤の間に待せしむるため、豫め先に遣つて置いた。さて京山は行つて見ると、まことに嶮阻なる道に、崩れかゝつた茶屋が僅に一軒あるやうな山間に、其近所には見られないやうな女が居て茶を侷める、酒を饗する、これにも吃驚して聞いて見ると、小千谷の妓なる事がわかつて、さうかと領いたのであつたが、歸途連れ立つて戻つた時に、孰れも草鞋をはいて歩き出したのを見て、これはとても都會には見られぬ一種の風俗だと、頗る面白がつた事などが書かれてある。又三國峠みくにとうげを通つて或茶店に憩ふと、天然の水があるので、京山は之に大なる興味を覺えて「其水を」といふと、砂糖の代りに豆粉まめこをかけて出されたのには京山も辟易して、荷うてゐた

行李の中から砂糖を取り出し、かけ直したといふことも載つてゐる。

二〇 京山と其家庭

ついでながら京山に就てもう少し録して置かう。それは雪譜のことに關係する以外、しばしばの往復に京山が其書簡中に現はしてゐる事實で稍々趣味ありと思ふ京山の身の上に就てゝある。京山は牧之と同甲で、四十年交つたといふ、その交情は友人といふよりは寧ろ親戚の味ひがある。従つて書簡のはしには必ず互に親族合ひの事迄も叙するのが常であつて、それによつて兩者家庭の事もおのづから窺はれる。

京山には三四人の娘があつて、三人いづれも諸侯に仕へてゐた。中にも二人の娘は長州侯に君されて、その中の一人はお妾になつて二人の子まで擧げて居る。そしてその娘は侯から京といふ名を與へられて居た。その妹も亦長州侯に仕へて居る事實が京山の書狀中に見えて居る。この事について牧之は例の「兒孫に示す」の序文の終りに附記して居る事があるから、それをここに抄録して見る。

京山、余と同齡ながら白髪なく眼明かに上下の齒鮮か也云云、又序にいふ、京山娘五人の内
兩人踊り上手にて長州侯（萩の城主松平大膳大夫）に御覽に入れ候處、御満悅の上兩人共
に奉公に參上候様（荏土えどの踊は芝居也）仰せあり、山東答に、賤き者の娘、第一仕付が大
金故力不及と申すを、奥女中より、物入りは此方にて致すとの事につき差上る、間もなく
一女は中老に立身、殿様よりお京と名を賜はり寵遇渥く、後には御部屋となり、姫君翌年
若君誕生、斯くなれば親元より願出れば親元へ三百石被下家例なれども山東願出す、併し
山東部屋へ出れば羽振よしとの事、妹は若君御膳番と申す事、實に女は氏なくして玉輿に
のると是等をいはむ

ある。
京山の書簡にも、文政十二年如月二十二日附の分に、その娘を萩に遣はした事が一寸書いて

去年卯月十六日、娘二人、松平大膳様御供にて三百里外の旅路を長門之萩に發足、いまだ
年行かぬ者共故一ヶ年之在勤心元なく、妻をも番頭お乳の人に付てつかはし、跡は男ぐら
し之私並伴兩人、おろかなる手代小者など、味噌桶之世話までいたし、男やもめ之うぢう

ぢくらし居り、殊之外繁雜云云、妻並娘も所々見物いたし、當春三月二十四日めでたく歸着いたし候へ共、娘共はもとより櫻田御屋敷に罷在り、燒原よりは歸り不申、今に男ぐらしいたし居り申候

これで娘の消息が分る。全體世間には山東京傳、京山をいろ／＼研究する人があつて、此兩人は殿様の落胤だなど、いふ説もある。其眞否は知らないが、さう思はる、節は滿更無いでもない。考證家の説は姑く措いて、若し或人のいふが如く落胤であるとすれば、京山の女しづめが多く諸侯に仕へて居る點からいふと妾因妾果ともいふべきものがあるやうにも思はれる。流石に京山は學問があつた丈けに、牧之の自叙傳文にもあるが如く自分の娘の故を以て三百石の扶持を受ける事はしなかつた。それは京山の見識として認めねばなるまい。

又文政十二年九月の書狀中に、惣領娘の事をいうて居る。この惣領娘も亦大名へ行つてゐるのであるが、これは萩に行つて居るのとは違ふ。その書簡には、

私は惣領娘お増として二十三歳、當時松平大和守様え中老をつとめ居、倅京屋傳藏二十一歳、次にお京として十八歳、次に今として十六歳、此兩人は松平大膳様へ御奉公いたし、京は殿様

若年寄つとめ居候、末之男子は京水にて梅作と申候

というて居る。これによると惣領娘の次に長男、其次に娘二人、末が男子の五人の子供の内、娘三人までが諸候の奥づとめをして居たのである。京山は尙ほ自分の子供に對する家庭の實況について寫實的に興味のある光景を左の如く云うて居る。

親の子に於ける、胡蝶が菊を作る様のものにて、苗より種々丹精いたし、花の頃は己が胡蝶故、いつか老にのぞみ申候、俣未だ獨身にて近來花柳に狂ひ出し大に散財致し候、依つて未だ家事を許し難く、私浪人にて刀を差し候へ共士商の片身がはりにて、机の上に帳面をひらき燈下に十露盤をならすかと思へば編筆に拙詞を連ね、印をほるかと思へば製藥を丸め、袴をぬけば前だれを結び、田舎芝居の由良之助、五段六段の狂言綺語、世話しき中に笠をかけて松風を楽しみ申す事驕奢にあらず、茶禪に氣を養ひし迄に御座候

此書狀もなか／＼趣のある書きぶりで、彼れの日常や家庭の模様を簡單に叙されて居る。即ち武士かと思へば町人、戯作者かと思へば茶人、やはらかいもの許り書くかと思へば印刀を取つて篆字を刻する、その目まぐるしいやうな生活が如實に描き出されて居る。

二一 京山の餘技と嗜好

そこで京山が茶人といふことに就て少しく書くが、前に録した祝融の災に罹つて、京山があらゆる物を失つた時分、しばく牧之に書を寄せて、田舎の山村邊に籠かこ細工こまで極めてさびたものはあるまいか。それは自分が茶の時の炭取りに用ゐるのであるとて圖まで書いて、どうか搜してもらひたいと申し遣つたことなどが見える。京山も茶には餘程趣味があつたものと見えて、忙しい間にも時々定つた日には師匠の茶會へも出席し、或は自分の家で友人と茶會を催した事が書いてある。それに篆刻の技もかなりの處まで練達してゐたらしく、牧之に與へた京山自刻の印が書簡の餘白に四ツ五ツ押してあるのを見るに、今日では自分等その事に趣味を有してゐる者から云はせれば餘り上手とは評されぬが、兎に角先づ一通りは出来てゐる。隨分當時京山の文壇に於ける名聲を聞いて、印を託した者も鮮くなかつたやうで、筆を執る忙しい間には、時に印を刻してそれを生計の糧にあてたものである。

十數年に亘る京山と牧之の交際に於て、互に物を贈答したことも多かつたが、牧之は常に味

噌漬を贈つた。又寒晒し（片栗）かたくりを贈り、時には鹽引しほ引きを贈つて居る。その他種々なる越後の土産を贈るのが例であつたが、京山が何時も頻りに御禮を云うて喜んで居たのは、重にこの味噌漬、片栗、鹽引の三品であつた。當時は今の如くに小包郵便のあるわけではなく、飛脚が擔いで江戸迄持つて行くのであるから、軽いものでなければ土産として甚だ不便である。片栗にせよ、味噌漬にせよ、鹽引にせよ、分量は少なくとも重量は相當にある。それを何時も贈るので、京山は費用を構はずに贈つてくる此土産に對しては、いかにも御厚意有難しとて繰返し感謝してゐた。越後の味噌漬は其時分の江戸の食道樂者間にも餘程珍とせられたものと見えて、味噌漬の紫蘇ちそ、大根、茄子の類を京山の臺所では頗る大切にしてゐた事が其書簡に盡されて居る。又寒晒しも、江戸には類似のものはあつても全く製法が違ふので、京山は下戸であつた所から別して之を喜んだ。且つ自分の娘共が大名に仕へて居たので、この味噌漬、片栗は必ず幾何かを割愛して娘たちに贈つたもので、娘は又それを殿様に献上して居る。或は片栗が若君の食料に自然供される所から、大名に於ても喜んでゐたといふ消息が常に牧之に報じてある。京山を通じて越後の産物が、當時西國大名の味ふ所となつたのも亦興味ある事と思ふ。

二三 餘談 二一三

以上京山と牧之を中心としての「北越雪譜」著作苦心談は略々叙し盡したが、こゝに聊か餘談として附け加へたいことがある。それは馬琴に關しての事であるが、恰も京山の書翰集を一應借覽し終つた頃に、矢張り鹽澤の鈴木家から、其保存されてゐた馬琴の書簡集一冊をも借りて讀む機會を得た。それは文政五年といふ年の一年分の馬琴の書狀を綴つたもので、其一年間丈けでも野紙百枚以上からある大冊子となつて居る。偶々それを繕いて見ると、一番先に綴られてあるのが牧之から「北越雪譜」編纂の事を託された折の返翰である。

文政五年戊寅五月十七日附馬琴の書翰には、牧之から囑された雪譜編纂について色々意見を述べてゐる。第一は挿畫について、第二は此書の編纂について實地を見るの要ある事、第三には表題の事等について書いてある。先づ第一の挿畫についての意見は、

古人玉山は自然と板下の畫に妙を得たる人也、さして學問はなけれど才子なるべし、著述之事はいざしらず、此人世に在つて繪をたのみ、野生著述いたし候はゞ尤もよろしかるべ

し、江戸にては北齋之外此繪をか、すべき者なし、乍去彼人はちとむつかしき仁故、久しく敬して遠ざけ、其後は何もたのみ不申、殊に畫料なども格外之高料故、板元も喜び申聞敷、しからば誰と一人に定めず、東海道名所圖會の如く、唐畫、浮世繪、そのムキ／＼にてより合畫にいたさせ可申哉、これも畫師一人ならねば跡方のかけ合格外わづらはしく候へ共、山水などは江戸の浮世畫師之手際に行く事にあらず、又婦人その外市人の形は浮世繪によらねば損也、兩様をかねたるもの北齋のみなれ共、右の意味合なれば、より合畫に可致哉と存候事

前にも書いた如く、牧之は「太閤記」の畫で有名な玉山が越後に赴いた時に、之に畫をか、せる計畫で雪譜著作の事を話したことがあつた。馬琴の考も、か、せるには玉山がよいといふので牧之の考と一致したのであるが、しかし著作の事まで之に任せることは賛成出来ぬ、それは自分などが書くべきものであらうと、馬琴らしい自負をほのめかしてゐる。そこで畫に就ては既に世に亡い玉山は今更己むを得ぬとして、彼れよりも以上で必ず世人の共鳴を博する畫家としては北齋に限る、と馬琴は説くのであるが、しかし馬琴と北齋とは此時分不和の間柄であ

つた。當時北齋の畫名は頗る高く、門前市を成すばかりに繁昌して居た。その爲めでもあつたらうか、自から見識を持して居たので、や、もすれば馬琴と衝突した。馬琴の言ふが儘にはなつて居ない。遂には兩人喧嘩をするに至つて、其間が疎隔してゐた事も事實である。馬琴が北齋に向つて惡聲を放つことを辭せぬには、いくらかこの意味が含まれての事らしい。

元來一人で山水にも可、人物にも妙といふ兩者兼ね能くする畫工は容易にあるわけがない。そこで馬琴が已むを得ず寄合畫を工夫するに至つたので、例へば人物を浮世繪師に書かせ、風景を南畫趣味の者に書かせるといふ如く、各々其向々によつて長を擇び粹を鍾める方法を執らうとしたのも一應無理のない計畫といはねばなるまい。

其次には、實地に臨み越の山、越の川、さては其風俗人情まで親しく視察を遂けた上でなければ、執筆は出來ないと云うて、其書翰に左の如く書いて居る。

右の一著述あらまし認め被遺候趣にてつゞり候へば、さしてむつかしき事にはあらぬを、愚意の趣にすれば、はなはだ手おも也、所詮御地を一見せずには筆を起し難かるべきかと存候、乍去旅行のことは前にも申候通り三里五里之歩行も自由ならず、且つ諸費をいとほ

すにといふ程の餘力も無之故、中々急には思ひ企てがたき業なれども、何とぞ明年明々春までに御す、め之湯治をかね、せめて御地を踏候て、その上にて著述いたし候はゞ、後悔も少く筆もとり安くと存候、この儀はかく存候までを申也、我身ながらわが自在にもなりかね候故申すまでにて、おぼつかなき事に御座候、今十年も昔に候はゞ如何ともなり候、何事も時節おくれ心のまゝにならず、これのみ残念の至りに御座候

馬琴の如き綿密周到なる作者としては、只牧之から與へられた草稿を書き直す丈けでは到底満足する事は出来なかつたことであらう。且つ京山は、自分が執筆しても京山自身の著作とせず、牧之の著として世に出さうとしたのに、馬琴は然らず、彼れ自らの著作として牧之が考訂するといふ形式をとらうとしたので、京山の時とは全く逆に出ようとしたのであるから、由來細心の馬琴としては實境を見んとしたのも當然である。殊に江戸に於ては殆ど想像のつかぬ大雪の事を書かうといふのであるから、土地の事情をも見、まのあたり牧之にも逢うて種々質問した上でなければ迂濶に筆は執れぬといふ感じを起したのも自然である。

併し此書簡にもあるやうに、さうしたいと言ひながらも、眞實さうする意があつたわけ

はない。馬琴としては、たとひ越後漫遊の望みはあつたものとしても、當時の事情が許さなかつたのであつて、この書簡から見て到底出来ないといふことを暗示して居るやうな氣がする。又それは果して實現せずして終つたのである。最後に書物の表題について曰く、

外題の事色々考見候處、北越雪中圖會などいたし候ては、只今圖會ものすたり候故をかしからず、又北越雪話などいたし候ては外題かろく、わづか二三冊之半紙本めきて損也、又先年北越奇談と申す書世にあらはれ候へ共、當地にては評判どつともいたし不申、北越之二字先をこされ今更人まねする様にて残念也、依之「越後國雪中奇觀」と可致哉と存候へ共、雪中の二字未だ落ち着不致候様に存候、いづれ尙又近々之内とくと考へ、立同放言奥目錄中へ右之外題をあらはし、その外追々拙著へ右外題を書載せ、世之人に知らせおき可申候、左様に候へば、うり出し之節大につよみになり申候、尤も越後鹽澤鈴木牧之考訂といたし申候、随分御骨折らせられ、出版成就之節御亡父様への御孝養にもと存候事に御座候、奇觀之二字は動くまじくと被存候、いかゞ、六出玉屑みな雪の事なれ共、さては俗へ遠くて損也、雪中之二字とくと考可申候事

前掲馬琴の書簡を通讀して見ても、當時彼れが頼りに外題の事で苦心して居たことがわかる。實は本の賣れると否とは主として外題の附け方如何に在るので、作者としては第一に其選定に心を砕くが古今共通である。依頼を受けると匆々、眞先にこの外題について馬琴が意を用いたのは無理からぬ事である。

そこでいろいろ考案の結果、遂に雪譜といふ字を考へ出したのは、この書簡を發してから後の事に屬する。鈴木家から借覽した馬琴の書簡集も調べて見たが、雪譜と命名するに至つたことを認めた書簡は見出さなかつたから、それ丈けが缺けて居るのであらう。尤も綴られた書簡中に、雪譜云々といふことが散見される所から察すると、命名に關する書簡が其間にどうしてもなければならぬ筈なのに、これが缺けて居る所以は、恐らく其分丈けが半切れか何かにか書かれてあつて、一定の用紙に書かれた書簡のみを綴る場合に、それを挿む事が不便であつた爲めに此分丈け逸したのであらう。兎に角雪譜の名が馬琴によつて選ばれたことはたしかで、後に其著作が馬琴の手を離れてからも猶ほ其名を用ゐなければならなかつた次第も前に擧げた通りである。

馬琴の書簡として引用した前掲三斷の音信は、實は皆連絡したもので、同一便に寄せたものであるが、たゞ説明の便宜の上から三つに分けたのである。この書簡は、牧之が雪譜編纂の事を馬琴に託した當時の事情を語り、又一面には、まだ京山の引受けない前の経緯を推知する資料ともなるものである。

尙ほ終りに書き加へるが、文政五年といふ僅か一年の間に牧之に與へた馬琴の書簡は、罨紙で百枚以上二百枚近くになつてゐることは前にも書いたが、此の他に散逸した書状はいくらあるかわからないから、之をも集めたら非常な量を示すことであらう。當時の人は書簡を認めるに堪能であつたからでもあらうが、馬琴の如くに筆硯の忙しい寸陰をも惜むその人が、よくも斯うまで努めたものだといつて感入るのほかはない。

六 私 の 隨 筆 觀

「隨筆」といふ一類の書物は、その書名の通り、心の赴くまゝ、意の動くまゝ、筆に任せて書いたものをいふのである。耳に聴き目に觸れたことのみを書いたのもあれば、それに感想を添

へたのもある。或は自家の主張を述べ、若くは他人の説を駁したのもある。其體に於ては秩序倫次なく、雜然と書いのもあれば、理論井然、一貫した思想を陳べたのもある。文は和漢兩様の外に漢和混同もある。隨筆と云はずして隨筆であるのもあれば、隨筆と銘を打つたもので隨筆らしからぬものもある。兎角隨筆の範圍は甚だ廣い。若し更らに廣義に解すれば、其範圍は一層廣くなる、随つて其領域を劃然と定むることは甚だ困難である。併し普通隨筆といつてゐるのは、片々たる記事の臚列で、各篇の長短は區々だが、概して長からず、事項は多般に涉つて、その排列は概ね錯綜してゐるのを隨筆といつてゐる。匆卒筆を走らせて、多く意を構へず、漫りに書くものとすれば、勢ひ斯くの如くならざるを得ぬ。其内容に至つては千殊萬別で、或は單に遺忘に備へるため、見聞のあらましを記すもあり、それに感想の伴ふものもあり、或は何事かを研究せんとして、その資料を書きあつむるもあり、往々筆者の獨創の見識の發露もあれど、抵ね不纏まりの者の多いのが、隨筆の特徴であらう。勿論其人の専門や學殖や趣味などの相違で、内容に相違がある。乃ち史家の隨筆は史料に偏し、考證家は穿鑿に専らであり、畫家は畫論に偏し、詩家は詩話で持切り、劇通は演劇一點張りであるなどは誰れも知る所

であらう。

爰に多少の考察を要するのは、隨筆の著者の心掛如何といふことである。著者に出版や公示の意思があるでなく、唯だ心覺えに書くのと、出版若くは公示の意があつて書くのとで、自然隨筆の面目が違つてくる。全く他人に見せる意のないものには、己れの祕密も蔽ふ所なく書き散らし、他人に對する批評なども忌み憚る所なく露骨に書くのは自然の勢であるが、之に反して公刊を期するものになると、自然人を怡ばしめる意匠を要し、文章も材料もおのづから精ならざるを得ぬ、これも亦自然の勢といふべきであらう。よく纏まつた隨筆は後者に屬し、秩序倫次を缺き、雜然たる間に生の味あじのあるのは前者に屬する。かの柳里恭の「獨寐」ひよびねの如きは、どう思うても刊行を期したものとは考へられない。馬琴の「玄同放言」の如きは、自家の學識を銜はん爲め公刊を目的としての著であることは否むことが出来ない。松浦公の大部の隨筆「甲子夜話」は私が窃かに隨筆の王と呼ぶものだが、あれは公の生前刊行されなかつたけれども立派に纏めることに努力したものである。蜀山人の「一話一言」に至つては、幾許か自然の隨筆に近い趣がある。それだからいくら蜀山の筆になつたとは言へ、各項に興味があるとは

言ひ難い。尙ほ文章本位の隨筆、事實本位の隨筆といふ區別も立ち得るであらう。古くは「徒然草」^{つれづれ}近くは樂翁公の「花月草紙」などは、文章に意を用いたものである。併し此二書は文章ばかりでなく、書いてある事にも趣味があるから、文章本位の例とするには不適當かも知れぬ。漢文隨筆は概して文章本位の趣がある。

さて以上アラツボク類別した隨筆の内、どれがよいかといふ優劣の論になると、遽かに判斷を下しかねる。趣味本位から判ずれば、刊行せん爲めに作つた隨筆、然らざるも偶然編次をなしたのでなく作らんが爲めに作つた隨筆は、材料も精選され、文章も意が注がれて居り、おのが好む所にのみ偏せず、衆多の讀者を怡ばしめる用意もあるから、一般に受がよいのは言ふまでもない。世に名高い隨筆は皆此範圍のもので、幾十回も版を重ねてゐる。之れに反して敢て筆者自から刊行の意なく、唯だ筆のまに／＼心覺えに書き散らした隨筆の類になると、多くは高關に束ねて省みられず、爲めに埋没して還魂紙の料となつたものも少なくないが、實は此中に惜むべきものが數知れずある。例へば工藝家の隨筆のごときは、多くは専門の事にわたり、文章は抵ね拙であるけれども、其の語る所に趣味もあり、又大切な意味もある。夫の世阿彌

の「十六部集」の如きは、足利時代の詞で質朴に書かれてゐる爲めに久しく埋没してゐるが、能樂のため一道の光明を放つ大切な書物として今は尊敬を拂はれてゐるではないか。豊太閤が寵した博多の豪商神屋宗湛の茶日記なども、亦前に譲らない價值がある。すべて斯ういふ人達の、は文章はマヅクても、其潤色のない處が却つて率直に赤裸に事の實相を道破してゐるので、能文よりも往々優る處がある。世に俗書と云はれて漢學隆盛時代士林に唾棄された多くのもの、内にも、亦頗る探るべきものがある。市井の商估などの物したものの、覺束ない筆であるから悪文でもあるが、鄙猥の事をあらはに書いてゐるので却つて天真流露の味があつて、市井の風俗人情を知るの好資料となる。兎角美文は物を美化する爲めに、往々事相を蔽ふの失がある。文章の巧拙を以つて直ちに隨筆の優劣を定むるのは輕率の譏りを免かれぬ。

私は何れかといふと、眞率に素朴に、殊更でなく自然に出來た隨筆の方に重きを置きたいと思ふ。假令否らすとも、暗黒裡に埋没してゐる多くの隨筆を明るみへ出し、今の世用に供したいと思ふ。斯る眞率の隨筆にこそ、自から欺かぬ記述がある。赤裸の實生活が斯る隨筆に於てこそ描かれてゐる。筆者の性格、其心匠の如きも、此等に就て初めて知ることが出来る。往々

にして他人に知らしてならぬ祕密も、此方面の隨筆に搜し得る。或は其人の工夫半ばの事を不備を厭はず書いてあるのも、此種の隨筆の一特徴である。讀者がそれからヒントを得て、未熟の工夫を終に大成に至らしめることもある。此種の隨筆は抵ね一家の私記であるから、日誌と其趣を一にする。何事も蔽はず隠さず其時の感情で眞率に書くから、そこに一種の味があると同じ様に、此種の隨筆にも同様の趣致があつて、日誌よりも筆数が多い丈に趣味も一段深い。

要するに隨筆は百味筆筒の如きものである。一部の隨筆が既に百味筆筒である。全體の隨筆は、勿論適切に百味筆筒に譬へ得る。此筆筒の抽子ひきだしに數知れず藥味が入つてゐる。そして皆味が異つてゐて、辛いのもあれば甘いのもあり、苦いのもあり、酸いのもある。小粒であるのが其特色であるが、形や色もさまざまで、硬いのもあり、軟かなのもあり、精製もあれば粗製もあり、生なまなものもあり、加工したのものもある。小粒ながら形や色や味が多般多様である處に趣味がある。されば百科の書物の内に興味のあるものは隨筆の右に出づるものは無い、それ故昔から多くの隨筆が出版されてゐる。併し出版されたもの、みが必ずしも良いものとは限らぬ。埋没して世に出ないものがまだどれほどあるかわからぬ。その内に既刊のものよりも遙かに興味の

あるものも夥しくある。然るに妙な事には、隨筆を漁るものは、いつも同じ抽子を明けて、他の抽子に手を觸れないのは何故であらうか。百味簞笥の内に全く手のつかない抽子は幾百千も残つてゐる。いつも隨筆叢刻となると、有名だけに有り觸れたもの、みを多く採るのが例となつてゐる。いくら有名なものでも、餘り繰返しては味が薄くなる。皆な其の味に慣れては興も亦無くなる。何故に手附かすの抽子から取り出さないのであらうか。そこには久しく潜んで世に出られないことを押つてゐるものが夥しくある。そのすべてが、必ずしもよいものとは限らないが、世間の思ひも寄りぬ味の異つた珍奇のものが數知れず埋没してゐる。今どき隨筆を叢刻するに、手をこれに付け、それをさらけ出すのでなければウソだ。全體隨筆には種々の形式がある、普通所謂隨筆の形式にのみ泥むと、多くの逸物を取り逃すことになる。飽くまで境域を廣めて、形式に泥まず博搜を力めねばならぬと思ふ。

七 日誌を書く心得

私家の日記

日誌は「起居注」とも云はれて起居の記録であるから、日々書き續くべきものであるが、之れを爲す人と否らざる人とがある。私は壯年から三十七八年日誌を書きつゞけてゐるので、日誌に就て幾何か経験があるが、實は此の習慣の廣く行はれんことを望むものである。

廣く日誌と云へば、いろいろ種類もあるが、公私の日誌が大別で、私の今云はんとするものは、専ら個人の日誌に就てある。

何故個人の日記が必要かと云ふに、これはつまり一個人の記録で、それが積ればその人一代の歴史となり、それが又何代も積れば一家の歴史となる譯だ。最も多く自己を知るものは自己である。自己に非ざれば、自己が是まで如何なる経路を踏んで進み來りしかを知悉するものはない。

日記を書かぬ人は、往々にして日記否定説を唱へて云ふ。「私人の日記なんて、そんなものがあるものかい。——若しえらくなつて、世の中に樞要の地位でも占めて居れば、その人の一

舉一動は天下に關するから、それを書いて置く必要もあるが、徹々たる人間の日前の行事を記した處で、風の前の批辯にも値せぬぢやないか」と。しかし翻つて思ふに、一言一行、天下の休戚に關するやうな要路の大人物は、その人自身が日記を書かずとも、その人の行動は新聞なり雜誌なりに現はれて、他人が之を記録して呉れる便宜もあり機會もある。之に反して、えらくない人間即ち徹々たる人間の行事は、之を自分で書かねば誰も書いて呉れるものがない。此の點から考へても、私家の日記は必要である。

青年時代の日記

青年時代の日記——年尙若くして、言行共に未だ穉氣を脱せざる時代の日記は、見様によつては殆んど全く不必要なやうにも思はれる。で、一部の人々は「世間へ出て、何か相當の立場を得るやうになつてこそ、日記といふものは必要であるが、未だ乳臭を脱せざる時代には、日記などは無用の物だ」など、云ふ。がそれは誤つてゐる。凡そ事の成るは、成るの日に成るに非らずして、その由つて來る所は久しいのである。人が或る地位を得て社會に立つてゆくに

は、其處に到る委曲の経路がある。而してその経路は、大方これを青年時代に履むのである。茲に於いてか、青年時代に日記がなければならぬ。青年時代の日記は普通の歴史に比べると、先づ「上代史」と云つた格である。

世間には、老境に入つてから日記を書く人は少くないが、若い間から日記をつけてゐる人は甚だ少ない。否、全く見當らぬ。實に残念なことである。自ら執筆することの出来ぬ幼少時代は兎も角、苟くも自分で記録することの出来る時代から、相當の年輩に達するまでの日記は、將來に於て大に必要缺くべからざるものとなるに相違ない。なぜなれば、青年時代はその人に取つて、最も重要な活動の準備時期で、その間には志を立てることに煩悶したり、目的を達する爲めに懊惱したりする。何う云ふ動機で何う云ふ志を立てたとか、何う云ふ理由で何う云ふ學問を選んだとか、何う云ふ人々と交際したとか、何う考へたとか、何う感じたとか、若い時代の胸裏を往來した感情思想が、一々日記の中に點綴されて來るのであるから、將來之を回顧して無限の感に打たれるに相違ない。殊に趣味の上から觀ると、ウブな時代の日々の行動は興味のあるもので、天真爛漫なる當時の有様を、老境に至つて知らうといふには、日記に増し

た材料はないのである。獨り自分ばかりでなく、他人が見ても若い時分の日記は面白いものである。此の一種懷舊的の興感は實に尊いものであるが、一度失へばまた之を恢復することが出来ぬ。

一體日記をつけることを面倒がる人が多いが、實は何でもない事で、眞に一擧手一投足の勞なのだ。日々、其日其日の出來事なり、思想なりを書き記すといふ事になれば、電車が惰力で軌道の上を走るが如く、自ら筆が走つて雜作なく日記といふものが出來て行く。一口に云へば、日記を書くことが本能のやうに成つてしまふ。かくの如き習慣が善なりや惡なりやに至つては、殆んど問ふべき必要がない。日々の行動を、日々規則立て、書くと言ふ習慣は、推し擴めて云へば、日々の仕事を粗漫にせぬと云ふ事になり、また必要の事を筆まめに書く動機ともなり、親戚や友人への手紙の往復を厭ふやうな弊害もなくなる。一寸考へても、この習慣は斯様に結構なものである。

日記を書く要訣

日記を書いた経験のない者から観ると、日記をつけるのは極めて億劫に思はれるが、慣れば何でもない事である。試みに一箇月繼續して見よ、所謂「習ひ性となる」で、日々或る時刻が来ると、書かねば氣が濟まぬやうになる。用事があつて夜を更かし、遅く歸つて來ても寢前には屹度つける。つけなければ眠られぬやうに成る。これは自分の、三十餘年日記をつけてゐる自分の経験から保證する。扱て日記をつけるには秘訣がある。秘訣と云ふと仰々しいが、その實何でもない事だ。

第一 善く書かうと心掛けてはならぬ 文章をうまく書いて、味を持たさうなど、心掛けでは駄目だ。美くしい文章を作るには時間が掛る、考がある、自然面倒くさくなつて中途にして止める。之では何にもならぬ。一體日記に最も尊ぶところは連續といふことで、短い間が委しいよりも、略でもよいから長い間續く方がよいのである。故に日記の文は走書きで、文章を氣取る必要はない。

第二 人に見せる氣になる勿れ 元來日記は一家一人の私乗で、人に見せる爲めのものではない。唯だ自分が分りさへすれば宜しい。言ひ換へれば人に見せる氣を起してはいけぬ。尤

も古くからある日記には、人に見せる爲めのものも尠くない。例へば「紫式部日記」、「土佐日記」の如きは實に立派な文章で、これ等は恐らく人に讀ませる爲め作つたものであらう。さればその目的は文章の美を發揮する點にあるが、日々の日記をつける者には、こんな心掛は無用である。

第三 赤裸々に書くべし 又殊更らしい事を書いてはならぬ。殊更らしい事を書くとき、天真爛漫の趣を害して却つて面白くない。前述の如く日記は自分の爲めのもので、他人に見せる物でないから、自分の事柄は一から十まで有りの儘に記すが善い。場合によつては自分の失錯をも書くが肝要である。本居宣長は、極めて謹嚴な學者であつたが、併し書生時代の日記の残つてゐるものには花柳界へ足を踏み込んだ事が明記してある。人間は所詮人間である、神ではない、かう云ふ失錯もある譯である。元々日記は一家の私乘であるから、何も隠すには及ばない、赤裸々に書いて置くがよい。やゝもすると、恚々いかの事を書いてはと、自ら恥ぢて書き洩したり、或は事實を裝飾したりする者がある。これ等は日記として不都合の極である。思ふ存分に、飾らず偽らず書いておくと、後來それを讀む場合に非常な興感を催し、また少なからず反

省の資を得ることがある。

第四 單調を憂ふる勿れ 日記をつけてゐる人の中にも「どうも毎日の事柄が單調で困

る」など、云うて、折角つけ始めた日記を廢めてしまふものがある。併し此等は尙未だ日記の趣味を知らぬ者である。日記を書く習慣がつくと、同時に一種の趣味が生じて來て、少し考へれば書く可きことが幾らでも湧いて來る。人と何う云ふ談話を交換したとか、何を見たら何う云ふ感じが起つたとか、誰々に何を贈り贈られたとか、かう云ふ風の事は皆日記の好材料だ。考へて見て格別面白くない事でも、書いて見ると案外に面白いことがあるから、選擇に少し用意を用ゐれば書くべき事は幾らもある。豈に管に晴雨寒暖に止まらんや。苟くも赤裸々に自己を現出する以上、比々皆日記の種ならざるはなしだ。

第五 少しく世の大事件に觸れよ それから、日々起る社會の出來事、小さい事は無論記すには及ばぬが、大問題、大事件は少し觸れて置く必要がある。委しい事は新聞や雜誌に出るから書く必要はないが、これ／＼の事があつた位は記して置けば、後日の思出にもなり、亦參考にもなる。

第六 銘々得意の味を附くべし

更に一步を進めて、詩を作り歌をよみ俳句をひねり、畫を描く人々は、自己の嗜好に従つて、それ〴〵得意の作を所々に挿むがよい。ひとり作を保存する便利があるのみならず、文字に現はれぬ一種の趣味を添へることにもなる。全體日記に最も趣味のあるのは、詩歌俳句繪畫などの挿んである物である。渡邊華山の日記の持て囃さるゝのは、自己の目撃した種々のものをスケッチして豊富に收まつてゐるからであり、河鍋曉齋の繪日記は文句よりも繪が主で滑稽味があるから、これも亦興味がある。

八 書簡 三 説

一 書簡は情の使者

書簡を普通「書狀」と云ひ、亦單に「狀」とも云うてゐる。互ひの狀況や状態を通ずる所から狀といふのであらうが、狀は「情」と普通でもあり、互ひに状態を通じ合ふことは取りも直さず情意を通ずることであるから、狀と情とは、ひとり普通のみでなく、狀の字におのづから

情の意が籠つてゐるとも云ひ得よう。されば狀袋は情袋で、封筒は情を包むものと解し得るであらう。書狀は眞に情の使者である。

昔し蘇武が匈奴に使用して留まること十九年の長きに及んだが、尙ほ歸ることを許されなかつた。茲に漢の使節が蘇武の境遇を氣の毒に思ひ、何とかして歸國させたいと、匈奴の王單于ぜんごに見えた節、詭いで云ふには、漢の天子が一日狩獵に出かけて雁を獲た、その足には蘇武の書簡が結びつけてあつて、備つさに歸思の切なることがあつたので、天子も之れを見て落涙に及んだといふと、流石に單于も氣の毒な情が動き、終に蘇武を放還したと云はれてゐる。一時の方便に書簡を假りて云うたことが蠻王を動かした、況んや實の書狀をやだ。

某外國に郵便稅率を大いに高めたことがある。貧人はこれが爲めに一方ならず不便を感じ、隔絶の地にある親戚と郵書の交換をすることがたやすく出来なくなつたので、互ひに申合せで、爾後は郵稅を貼らずに白紙を封じた書簡を發し合ひ、それが届いたら平安であるもの、解し、開封せずに押戻すことにしたとある。白紙の書簡ですら尙ほ且つ情を通ずることが出来る、況んや文字ある手紙に於てをやだ。

情思を通ずる文は、必らずしも巧を要せぬ、拙と雖も情を動かすことが出来る。茲に手近に一例がある。それは頑是ない穉兒より旅先の私に送つた端書で、文面は、

トウサマ、ヲカヘリノトキ、ヲミヤゲニ、

リボン、ゴシキエンピツ、クダモノ

キツト

とある。幼稚な文言ではあるが、穉兒の情は躍如としてゐて、殊に末の「キツト」の三字に千鈞の力がある。よく引合に出る、龜かめといふ馬喰ばくちが米を貸した督促狀に「なせくさぬ（寄越さぬ）、くさぬならおれがゆく、龜かめが腕うでには骨ほねがある。」といふ末句の力あるに較べても敢て遜色が無いではないか。

圓珍庵羅城が或る人に與へた書狀に左の一節がある。

吉井村勸助ちうおの子有、彼が妻を傳九といふ男盜取自妻とす、いろくむづかしき譯ありて、勸助馬池にて切腹、その遺書おかしき事故、寫し遣す、

其の書き置は、

垣を木の事

やい傳九、よも我をたばかつたな、うぬめく、やんがておもひしらせん、まつてをれ、
うぬめ傳九。

文は鄙野なれども鬼氣人に逼るの概がある。羅城はこれに附記して「これ等を見れば、文をかざり、筆をあやつるは、すべて二等に落るか」とある通り、斯る不出來の文でも、熱情が籠れば、飾つた文よりも人を動かす力に於て一等上に位する。

昔し英國のエリザベス朝に、外國に駐紮する使臣から本國の妻へ送るべき書狀を、誤つて女皇陛下に呈する公文と取違へて封筒に入れた。これは勿論失態であるが、其過失が却つて幸となつた譯は、妻宛の私信には備ひかさに外國に駐在することのつらさや、ホームシックを起してゐることや、俸給と交際費の不十分なる爲めに十分の活動が出来兼ねることなどを、こまぐと認めてあつたので、女皇はそれをみそなはして坐るに氣の毒に思し召され、直ちに増俸の御沙汰があつたといふ。駐外使臣が正式に陛下に窮を訴へても、斯く響の聲に應ずるやうな要領を得無かつたであらうに、眞情淋漓たる私信だけに、斯くも陛下の同情を博し得たのである。

芭蕉が門人去來に金を借りて遣はした文がある。

過日芳野行脚存立候間金二兩二分御かし可給候、押付もらひため返濟可申候、されど我等事に候へば、えなしまじく候

簡單な文ではあるが、師弟の情味は淋漓としてゐる。追つてもらひ溜めて返濟するつもり、併し我等のことである、恐らく返濟出来まじとは何等眞率の言ぞ。芭蕉の風格は躍如としてゐるではないか。

豊太閣は勿論文字に爛はない。其の書簡は覺束ない假名文であるけれども、眞率の味があつて氣魄が溢れてゐる。其の陣中から愛妾淀君に與へた手紙の内に、

(前略) 二十日頃にはかならず参り候て、わかきみだき申可候、そのよさ(夜)そもじをも、そばに寝させ可申候、せつかく御待候べく候

又他の一簡には、

返すく御ゆかしく候ま、やがてく参り候て、くちをすい可申候、又われくるすに、人にくちを御すはせ候はんとおもひり云々

此の書狀に所謂「わかぎみ」は秀頼をさすので、子を思ひ妾を思ふ眞率の情は紙幅に溢れてゐる。留守に他人の接吻云々は、流石の豪傑も嫉妬は押へ切れなかつたと見える。しかし如是き眞摯の放言は豊公ならでは出来ぬこと、書狀が情のメッセージであること、これ以上説くを要すまい。

二 書簡の八難

手紙を上手に書くことは案外難事である。大儒の手紙が必らず巧うまいとも限らず、能書の人の手紙がよいとも限らない。字がよくとも手紙の體を爲さぬものがあり、學殖があつても手紙の拙な人もある。近頃になつては、別して手紙が下手になつて、文壇に名聲ある人でも、手紙を書かせると成つてをらぬのが少なくない。殊に近來の手紙の書き方は、男女の區別がつき兼ねるほど混亂して、有鬚の男子の筆に成つたものが、餘りに女性的で人をして嘔吐を催さしむるものもある。手紙は文章の内でもおのづから一體あるもので、實はよく書くことが決してたやすくはない。中にも或る場合の手紙は頗る書きにくい。私は曾つて書きにくい手紙は何かと考へ

て見たことがある、數へて見ると八類程ある、今其の大略を左に掲げる。

第一は自分より目下めしたのものにやる手紙である。目下のものにやる手紙は、普通用ゐる敬語を省かなければならぬ。處が敬語を省く結果は、何となく高慢らしく聞える。それを高慢らしく聞えぬやうに、而も威あつて猛からず、自から溫情の籠つて居るやうに書くのは、容易でない。初心の者には殊に困難である。私の知れる限りでは、近頃の人でかういふ手紙を上手に書かれた人は、故三條公の如きがその一人である。公は位人臣を極めた方で、何人も云はゞ目下である。然るに謙徳の人であつたから、敬語を用ゐずして、しかも傲らないやうにうまく書かれた。それから細川潤二郎男なども、先づ此の種の手紙に妙を得て居られた方であらう。實は此の種の手紙の名手は餘り澤山はない。これが書き難い手紙の一つである。

次に慶弔の儀式張つた手紙は、誰れも一と通りは書くが、儀式の手紙は、兎角儀式一邊に流れ易い。其間に自から優しい情味を籠めることは困難で、大家と雖も能くせざる場合が多い。斯うした手紙は、餘り淡泊に書くと、電信文と同じ事になる。さればと云つて、餘りくたくしく表情の辯を費すと、却つてそれが不自然になつて、何となくわざとらしく、輕薄ないや味

が伴うて来る。かういふ手紙に、よく其の中庸を得て、遺憾なく真情を表はすやうに書くのは、餘程むづかしい事と云つてよい。某女史が、ある人に贈つた悔狀を一見した事があるが、其手紙は如何にも情意並び到つた懇切なもので、弔慰の情もよく現はれ、頗る名文であつた。そして最後に「只遺憾な事には、御生前に一度も御目に掛らなかつた」といふ様な事が書いてあつた。一度も遇はぬ人に對して悔みを云ふ手紙に、かく情味のあるのは確かに老手であると思つた。これがその二。

さて三は見舞の手紙、例へば寒暑の見舞狀の様な、特別の用のあるでなく、たゞ左右を問ふだけの手紙は、雜作もなさ、うで、決して然うでない。斯ういふ手紙は、「御無沙汰でしたが相變らず御壯健ですか」と云ふだけでは一向に情味索然で、相手の人に何等の感動をも與へない。併し之れに點綴するに、土地の近況、或は隔絶した土地ならば、雙方の氣候の比較、或は自分の近狀、若くは最近に見聞した珍事などを以つてすると、さながら面接して話を交へるが如く、受取つた人も少なからず感興を惹起するものである。處が斯ういふ手紙をわざとらしくなく、素直に面白く書くことは、なか／＼むづかしいものである。

第四、婦人にやる手紙は、相手が相手だけに、多くは假名で書かねばならぬといふ不便がある。其の上むづかしい事柄を、力めて分り易いやうに碎いて書かねばならぬ苦心もある。普通用ゐる漢語を交へた手紙は、比較的容易であるが、此の柔らけた手紙がむづかしい。一歩進んで婦人の情を動かす程に書かうとなると、勿論文學的の修辭をも要するので、更にむづかしい。それも自分の細君や姉妹などいふ内方人に遣はすものは論外として、他人である異性に寄せる手紙には、誰しも困難を感じぬ者はあるまいと思ふ。此の種の手紙を上手に書いた人は、國學者の中にはいくらかある。例へば賀茂眞淵が門下の秀才倭文子シゴコの初旅に出る時贈つた手紙の如きは、實に其の標本ともなるべきもので、徹頭徹尾假名で書いてあるが、如何にも情愛が紙幅に溢れ、その嚙んで含めるやうに物教へをして居る處は、さながら慈母が愛嬢に對する趣があつて、そらろに讀者を動かすの妙がある。併し是等は有數の手紙で、餘り澤山は無いやうである。

第五、借金の云ひ譯をする手紙、並に金の無心を云ひやる手紙の書きにくいことは、茲に多言を費す迄もあるまい。此の種の手紙は、最も人の情に訴へねばならず、理合も亦相當に盡さ

ねばならぬ。随つてどんな筆不精の人でも、此の場合には相當に苦心するものである。平生手紙を書くに、此の時の心持を以つて筆を執らば、どんな手紙でも概ね成功するであらう。

第六、人に代つて書く手紙、これが又決して容易でない。全體自分の思ふ通りを遺憾なく書くすらむづかしいものであるのに、まして自分ならぬ人の情を寫さうとするのであるから、そのむづかしい事は言ふまでもない。曲りなりにも自分の書いたものは不思議に情の移り易いものである。そこで交際社會の禮式に於ても代筆は禁物で、自分が病氣などで萬已むを得ぬ場合の外は、代筆を使はないのが通規となつて居る。代筆の是非は兎も角もとして、代筆はなかなかむづかしいものである。

第七、長上を諫めるとか、若くは目上の人に金などの催促をする手紙も、亦書きにくいものである。此の種の手紙には、義理を明らかにすると同時に、先方へ對する敬意を失はぬやうにせねばならぬ。即ち最も辭令を巧に書かねばならぬ。如何にいふ事が筋立ちても、辭令が行届かないで荒立つやうなことがあつては、直ちに先方の感情を害つて、其の云ふ趣意を取つて呉れぬことになる。例へば後者の場合に於て、もとゞ當方から借した金を催促するのである

から返せと云へばそれでよい譯ではあるが、長上に對してはさうも行かぬ。矢張り相當に敬意を拂はねば禮儀として濟まぬ。さりとて餘り敬意を拂ひ過ぎると、先方で返しても返さなくてもよいやうな心持を起さぬとも限らないから、其の邊の手心をよく考へて掛らねばならぬ。先方を怒らせず、其目的を達するやうに仕掛けるには、全く書き方に苦心がいる。かつて加藤枝直といふ國學者が、其の師眞淵の子息に與へて、借金の督促をした手紙を見た事がある。それは先づ先大人眞淵に對しては子弟の關係があるから斯くくゝの特別の事をしたのであるが、今では代がかはつたから事情が同一でないといふ條理を分明にあらはし、さて之が督促に及ぶと云ふ順序で、條理と敬意とを並び備へて書いてある。かう出られて見ると、相手が如何にすぐとも領かねばならぬ事になる。此の種の手紙はその相手方と場合とをよく考へて工夫せねばならぬから、一通りならず書きにくいものである。

第八、他見を憚る手紙がむづかしい。此の種の手紙には、大抵「御覽後火中」など、書き添へてあるが例である。處が事實に於て多くは火中に附せられない、随つて早晚世に出て來る虞れがあるから、之を書く時に豫め用意を要する。勿論出來るだけ相手にのみ分るやうな書き方

を選ばねばならぬのであるが、兎もすると相手にも分らない事になり易い。のみならず他見を憚る手紙には、密書の性質として他人の褒貶毀譽に亘る事もあり、或は權略に關する事もあ
る。斯る事柄は筆の使ひ工合で、人を傷け且つ自分の人格を下けるやうな事がないとも限らな
いから、大いに注意して筆を執らねばならぬ。よし又匿名にして之れを書いた所で、その筆蹟
で本人の誰れかは直ぐ知れる。依て筆蹟の分らぬやうにすることに就き、私の感じた事が一つ
ある。それは自分の筆蹟を隠す一つの手段として片假名で書く事である。即ち手紙の全文を電
信文のやうに片假名で書けば、自分の筆蹟は略々隠し得るものである。別に要もない事ではあ
るが、ついでだから爰に述べておく。

所謂書きにくい手紙といふは、必ずしも如上の八類だけに限らないが、もと／＼手紙は輕々
に書くべきものでない、又無雜作に書き得べきものでもない、平生深く感じてゐる所から、
假りに此の八難を數へて見たまでである。

三 書簡保存のすゝめ

私が早大の図書館長であつたとき、自家の蒐集した古今名流の書簡百卷約千通ばかりを展覽に供したことがある。其際私の幼時の師星野垣博士も態々來觀せられたが、私に對つて實は今日貴所の藏品の陳列と聞いたから來た、成るほど豊富な所藏に敬服した。自分の家にもそれとなく存してゐる師友の書簡が少なくない、君に倣うてこれから整理を試みると云はれた。此展覽會に同縣人で東京盲啞學校長であつた小西信八氏も見えた。氏は私に一通の書簡を贈ることを約された。それは私の所藏に無いものであつたから喜んで其後惠投を受けたが、氏は後日私に云はるゝには、實はこれまで放擲してある友人などの書簡も、君の陳列を見てから急に惜しくなつて遽かに整理に着手した。さもなければ、君に贈るの書簡は唯だ一通にのみ止まらなかつたらうと。私が學生の爲めに催したかりそめの陳列が圖らずも如上の注意を惹き起し、それ迄は請へば容易く與へられた人達も、今は與へられなくなり、私に取りては却つて不利を醸すに至つたが、書簡の趣味と其保存の必要が少なくとも或る部面に認められたことを思ふと、私には之れを本懐として、折角の陳列の徒勞で無かつたことを喜んだ。

私は書簡の保存を世間に勧めたいのである。それは決して好事の意から出たのではない、其

保存が必要であるからである。保存を勧むる書簡は、古い名流のものとは限らない、近代の人の中でも現代の人でも、保存するの必要がある。既に古人の書簡が今日容易に得られない事を知るならば、今人のも今から保存に心掛けねばならぬ。然らざれば他日必らず古人のを今日求めて得難いと同じ困難と不便を感じるであらう。私が書簡の蒐集を始めたのは十數年前だが、始め方が既におそかつたことを歎じた。古い名家の手簡で手に入らなかつたものはいくらもあつた。古簡はさて置き、己が父祖の書簡をせめて幾通か欲しいと思つてもなか／＼手に入らなかつた。若し父祖の遺像に併せて面のあたりその聲を聞くと一般である書簡があつたならば、吾が未見の前人は如何に眼前に活躍するであらうと思つても、今は容易に得がたく、曾つてあつたものまでも、保存の心掛が無かつた爲めに今は皆散佚して仕舞つてゐる。若し今少し早く保存の心掛があつたらばと悔ゆれども詮がない。恐らく之れを悔ゆるものは、私のみでなく、必らず世間にも同悔の人があらう。

書簡が種々他日の考證となり、史傳の好材料となると云ふやうなことは暫らく問はずとして、單に筆者の面目躍如の點に於て、之れが保存の必要あることは、宛がら其人の寫眞を存し

置くの必要と同様である。否、私の見る所では、寫眞よりも寧ろ大切な意味がある。その故は、寫眞は唯だ其人の面貌風采を見るに過ぎない、その人の面貌風采から推して其人の性格を推測するに過ぎない。然るに書簡は、直ちに其人の言説、其人の感情、趣味、嗜好、性格を明かにあらはしたる無音の聲である。別して或る重要な機會に其人の性格を十二分に發揮したものにになると、寫眞よりも活きた趣がある。寫眞と書簡とを併せてこそ其人が發揮するのに、寫眞にのみ重きをおき、書簡や遺墨を閑却するのは何故であらうか。

世には記念の爲めとあつて、故人の寫眞を掲げたり像を刻んで建てたりするが、偏へに形骸にのみ専らで、其精神とも見るべき遺墨の保存などに、意を留めない傾きがある。試みに官署に到つて見よ、校舎に行つて見よ、將た會社を訪うて見よ、それ／＼に記念すべき人物の肖像は額などになつて儼然と飾られてあるけれども、さて其の人の筆蹟となると、幾んど斷簡零紙も保存されてゐない。故にいざ故人の言行録、功績録、其他記念出版などをしようとなると、其の資料を集めるに相當骨が折れる。殊に故人の筆蹟を得るに困しむ場合が少なくない。全體ならばいくらかも親戚や知人の間にあるべき筈のものが、唯だ保存に心をかけぬ爲めに皆散佚し

て、いざ必要といふ場合に初めて悔ゆるのである。

官署、會社、學校などで重要な書類は種々あらうが、就中其の創立の状況を語り、或る重大事件を語り、或る功勞者若くは恩人の事を語る書類の如きは、尤も貴重のものに相違ない。大切な記録と云ふものは、セコンドハンドに成つた覺束ない記録ではなく、親しく其事に關係した本人それ自身の筆に成つたものであらねばならぬ。書簡などは其一である。されば故人の記念會でも催す場合には、此等の遺墨が尤も須要の位地を占むべきものであるのに、他日記念物となるべきものが、早く其の當時に於て時々刻々反故籠に葬らるゝのが常習となつてゐるは、惜しいことである。

保存の心掛といふものはエライもので、僅かに其の氣がつくと、幾十年を経た曉には實に非常の事になるものである。その實例は大隈家の莫大の書簡の保存に就て見ることが出来る。大隈侯は豪放不羈の人で、自らは筆を執らぬ人である。他から多くの書簡を寄せ來つても、大抵は反故になつて居ると思つてゐた。日夕往來してゐる私は、手紙に興味はありながら、曾て一たびも大隈家に維新以來の書簡がどれほど保存されてゐるかを問うたこともなく、又それを念

頭にかけたことも無かつた。然るに侯が薨じて其の傳を編する場合には、未亡人から始めて維新以來各所から來た書簡が幾んど漏れなく保存されてあると聞いて、非常に驚いた。それを私の手で整理することになつて、さて庫より出したのを見ると、その分量の如何にも大きいのに更らに驚いた。二十疊も敷く二室を埋めるほどあるので、まるで手紙の海に漂うてゐるかの感があつて、最初は整理の方法すら立たなかつた位である。段々調べて見ると、明治十五年までの來簡は執事の手で可なりに整理されてゐて、目錄すら出來てゐたのに頗る便利を感じた。此の莫大の書簡は侯の傳を立てるに就ての好資料であるばかりでなく、維新から大正に及ぶ歴史を編するに就ての大なる資料であつて、實に大切なものが夥しくある。其の一端は侯の傳記に附屬して「風雲偉觀」と署した大冊に收めてある。又私が當時取調べ中に感じたことを録した長文も、其卷末に附してあるから、茲に委しく言ふことを避けるが、僅かに夫人が一朝保存の念を發したのが動機で、これ丈貴重のもものが残つたのであることを思ふと、如何に保存の心掛が大切であるか、知れるであらう。

故人を記念し若しくは史傳の資料とするものは、必らずしも書簡に限らない、然るに私が主

として書簡の保存をいふのは、書簡に偏して云ふのではない。書簡以上の遺墨の必要は尙更ら
大切であるけれども、書簡以外の遺墨は澤山にあるべき筋のものでない。學者や文人などなら
ば著述もあらうし詩書の類もあらうが、經營家、事務家などになると、其の筆蹟は僅かに書簡
に存するに過ぎない、私が主として書簡の保存を云ふのは、其れが最も得やすく且つ得る機會
が最も多いからの事だ。

書簡が他日の考證に必要である所以は、其人の意思が明暗の間に窺ひ得らる、からである。
書簡が、立派に書き直された記録にもまして價值のある譯は爰にある。前年前田家で出版され
た松雲公の傳を讀んで感服したのは、何につけても其の折々の書翰が數多く引かれてあること
で、流石に大切な手紙がよく保存され、それがよく役立つたといふ事にあつた。實は書簡ほど
正確に近いものはない、某年某月某日、或る場合には時刻までも注してある、(郵便の消印な
どがそれである)斯様に確實な文書は、書簡を措いて他に無い。書簡は漠然其の時代を語るも
のでなく、其の筆した即時を語るものである。此點から考へても、これほど其の折々の事を確
かに語るものはない。考證の資料として價值のあるのも此故である。

要するに書簡は、其當時要があつて、又後に要のあるものである、苟くも他日要あることが今日明かである以上は、之れが保存を心掛くべきは多言を待たぬであらう。そして之れを保存することは敢て甚だしい煩勞があるではない。但だ聊か勞ありと云へば、僅かに取捨の勞あるのみだ。一概に書簡ならば、其の筆者の如何に拘らず、内容の如何を問はず、悉く保存すべしと云うたならば、終には置くに所もないことになり、結局玉石併せ焚かるゝの災厄に遇うであらう。即ち無差別に保存することは、所詮其結果に於て初めより之れを保存せざるに齊しい。されば選擇と多少の整理が必要である。此の位の事は、心掛さへあれば、最初に於てこそ多少面倒とも感じもすれ、やがて習慣を爲すに至り、容易の事となるのである。名家に存する書簡は年を経るに従つて貴重なものとなる、其端は其當時の保存に發することを思ふと、此の心掛は眞に大切である。